眞匏祇’

涅織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
眞匏祇，

【Ｎコード】
Ｎ５２４７Ｙ

【作者名】
涅織

【あらすじ】
以前まで投稿していた眞匏祇の続編。
今回の舞台は地球！小さな星で大きな力の衝突！
護りたいものがあるからその両足で立つ。護りたいものがあるから強くなれる。
地球での仕事を終えて眞匏祇の世界へ戻るまでの話。

第一章　○●痲臨捜索編●○　第一話　地球に逃れた逃亡者達

地球についてからのこの数日、良い事と言えばホテルのカウンターの女性と仲良くなったことくらいではないだろうか。そんな事を考えながらいつものように帰ってくるのを待っていた。そしてドアのノック音が聞こえて勢いよく開ける、筈だが。今日は少しいつもと違うことが起こる。

いつものようにドアのノック音がして嬉しさで飛び上がった穂琥はドアを勢いよく開け放ち目の前に立つものを確認して一度ドアを閉める。

「・・・知らんぞ、こんなヤツ」

怪訝な表情をして穂琥は再びドアを開ける。今度はゆっくりと。やはりどう見ても知らない顔の男だった。首をかしげている穂琥にその男は少し困った笑みで尋ねたいことがあると申し出てきたので穂琥がそれを聞くことにする。

「眞匏祇、ですよね？」

男がそう言った瞬間、穂琥ははっとしてドアをバタンと閉めて部屋の奥へと走った。男は何食わぬ顔で部屋の中に入ってくる。

「逃げても構わないよ。だってここは最上階だ。逃げられない」

「あら？最上階だもの」

男の言葉に穂琥は返す。すると男は理解しかねた表情をしたが気にせずに穂琥に近寄ってくる。

男のことなどまるで無視するように慌てる様子もなく穂琥は窓を開けた。そしてその上の淵に手をかけて外へ身を放り出した。その行為に男は舌打ちをして走り出した。穂琥を捕まえるために。

放り出した身体は勢いと腕力で上に向かい屋上に着地する。それから辺りを見回してから追ってきた男のほうへと目を送る。

「そんなひ弱な力で俺に勝てると思っているのか？」
「え？私？無理よ！戦う力なんてもの！相手をするのは私じゃない。こいつ」

穂琥はさっと身体を翻した。するとそこには少年が着地していた。男としては辺りには一切気配がなかったためにそれの登場には至極驚いているようだった。

「はい、お願いします！薪♪」
「はいよ」

穂琥の言葉に薪が反応する。男は驚いた表情で薪を観察していた。一体何者かと尋ねてきたが薪はそれをかわした。己の正体を見ず知らずのものに簡単に明かすことなど出来ない。それだけではない。薪の身分をそう簡単には言うことが出来るわけがない。

薪は素早く移動する。一瞬にして男の足元に身を置き男のあごを捕らえて蹴り上げる。男はその痛みで声を漏らす。相手がただの人間であればこんな横暴な真似を薪はしない。でも相手は人間ではない。眞匏祇なのだから。屈んでいるその男に薪はさっと近寄ると男の額に手を当てる。

「じゃ、向こうで頑張れ」

薪の掌から眞稀が発せられる。その大きさときたら相変わらず目を釘付けにさせられる。しかし周囲には一切漏れていないのだから本当に大したものだ。

薪の眞稀によって男はその場からぱっと消えた。転送、といえば簡単だろう。地球から眞匏祇の世界へと返す行為。こうして地球にてこちらに敵意を向けて襲ってくるものは皆、眞匏祇の世界を追われた者たち。とはいっても決して薪が行った行為ではない。

薪は慤夸だ。眞匏祇の全土を支配する力を有した絶大なる存在。でもそれを薪はあまりいいようには思っていない。しかしこういう時にはそういう力を大いに使わせてもらっているわけだ。

というのも、この地球に存在する眞匏祇たちは先にも述べたが眞匏祇の地を追われた者、つまりは慤夸によって迫害を受けたことになる。慤夸によって追い出されたものは慤夸によって受け入れを受理される。薪が慤夸でなければ眞匏祇の世界へこのものたちを返すことが出来ないのだ。前代の慤夸、つまりは薪の父親が行ったことを今、返そうとしているということ。

男を転送してから薪は一息つくと穂琥に向き直って移動のことを伝えた。

「痲臨の情報が入った」

手短に薪は言うと部屋のほうにさっさと戻っていった。穂琥もその後に続いた。移動先を聞いて穂琥は嬉しくてはしゃいだ。

「また皆と会えるんだね！？」
薪はため息混じりに笑った。
今度移動する先は前に穂琥や薪が通っていた学校の付近。また中間達と会えるんだとはしゃいでいる穂琥を鎮圧して薪はホテルを出る準備を整えるのだった。

ホテルを出て移動先に到着してから薪は泊まれそうなところを探していたが、穂琥の目はまったく別のものを映し出してキラキラと輝いていた。

「薪！こっち！アレが見たい！」
「は！？ちょ、待っ・・」
「こっち！」
「うわっ」

穂琥に強制的に腕を引かれ声が漏れる薪だった。別にここに遊びに来たわけではないと訴える薪ではあったが穂琥の上がったテンションを抑えるには少し弱すぎたらしく、そのまま流される薪であった。

穂琥のゴリ押しで店に入った薪はため息をついて穂琥に付き合っていた。大抵女子という生き物が好むような場所に薪が飽きずにいられるわけもなく、半ば魂が抜けたように諦めてふらふらと穂琥の後を着いて行っていた。

「これ、どう！？」

突然穂琥が振り向いて自分の首にかかっているものを見せてきた。

「あーにあってます」
「なに、その棒読み！」
薪の反応に穂琥は少しむくれながら首にかけていたものを元の位置に戻す。さもどうでも良いと言いたげな薪に文句を言うべく振り返りその薪の肩越しに見覚えのある顔を見つけて固まった。
「・・・ん？どうした？」
その様子を悟った薪が穂琥に尋ねたので穂琥は後ろを示す。薪はそれに習って振り返る。
「し、薪！？」
後ろにいたそれは驚いた声を上げて駆け寄ってきた。
「あれ？籐下？」
久しぶりだと嬉しそうな表情を浮かべながら籐下が薪の前に歩み寄る。後ろに穂琥がいることに気がつくとにやりと笑う籐下だった。
「何だ？薪、穂琥ちゃんとデートですかい？」
「あるわけねぇだろ」
嫌そうな軽蔑したような、そんな顔をしながら籐下に言い放ったその言葉に籐下は苦笑いを浮かべた。
「おーい、籐下！先に行くなんてひど・・・あれ！？」

籐下を追いかけてきたもう一人が籐下と同じ様に薪と穂琥を見て驚く。

「獅場！薪と穂琥ちゃんだよ！久しぶりにこっちに帰ってきたみたいだ！」

「ぅおっほぉ！？そうだったのか！久しぶりだなぁ～！」

薪と穂琥が学校に通っていた時、同じクラスだった籐下と獅場。薪と籐下、獅場は久しぶりの再会を噛み締めていると、ふと気づいたように薪が穂琥の所在を確認した。

「あれ？」

すぐそこにいたはずの穂琥がいないので辺りを見回して籐下が出口付近に既に移動済みだということを伝えると薪の表情が凍った。それに籐下も獅場もぞっとして笑みのまま固まってしまった。

「勝手に出歩くなって言ってあるはずだけどぉ？」

「す、すみません！！」

薪の叱責をみて籐下はふっと眉を寄せた。

旧友と出会って穂琥のテンションも最高潮に近づき楽しそうに歩いているのを薪は呆れてみていた、が。突然表情を険しくして足を止めたので籐下も獅場も足を止めて薪の様子を窺った。

「どうした？」

「大丈夫か？なんかあったのか？」

二人の質問に薪は答えなかった。その代わりその険しい表情のまま穂琥の腕を鷲掴みして駆け出してしまった。置いていかれた二人は呆然としながら顔を見合わせた。

腕を引っ張る薪に文句を言う穂琥を無視し続ける薪に流石の穂琥も抵抗を見せる。引く薪の手を振りほどいて額に力を篭める。

「なにするの！二人がいちゃダメだっていうの！？」

「お前は一回、頭を改良しなさい！」

警戒の色を載せたまま薪が言う。穂琥はそれを言われて初めて薪が走り出した意味を考えた。そしてふっと自分に対する殺気に似た眞稀を感じ取ってぞっとした。人がいてはそれらに危害を及ぼす可能性があるから薪は走り出したのだ。

「人気がないところまで移動するぞ」

「う、うん！」

薪に言われて穂琥も全力を以って走り出した。

誰もいない寂れた公園で薪は足を止めた。穂琥は軽く息を上げて辺りを警戒した。

「出て来いよ」

挑発するような薪の言い方にどこからともなく笑い声が聞こえた。周囲に反響して響くその声はどこからしているのかわからなかった。

「姿を晒す気は無いですね」

丁寧な言葉とは裏腹にそれに篭められた感情はまるで嘲り。薪の表情が警戒の色をなくした。

「そうか。余分に眞稀を使ってオレに勝てると思うなよ」

薪の言葉に未だ姿を見せない眞匏祇は嘲笑う。しかし穂琥は内心で思うのだ。どんなに全力を出しても勝てる気がしないと。

そうこう考えている間に薪が穂琥の視界から消えた。別に驚くことじゃない。薪なら普通のことだ。しかし相手のほうはそうでもないらしく驚いた雰囲気を醸し出していた。姿が見えないと高を括っていたのが間違いだ。薪なら眞稀を感知してどこに隠れているかなどすぐにわかる。そんなわけで簡単に引きずり出して薪は男を蹴り上げる。

「オレをやるつもりで来るのなら別にそこまでするつもりは無いけれど、穂琥を狙っているって言うなら話は別だ。少し、本気を出させてもらうよ」

地面に叩きつけられた男はうめき声を上げる。しかし別に薪に蹴り上げられたことであげたわけではない。むしろ蹴られたというのに痛みなどどこにも無かったための疑問の呻き声だ。

「まぁ、傷付けやしないよ」

薪のその言葉にどうやら甘く見られていると怒りを覚えたらしくその男は薪を鋭くにらみつけた。

「わかった、いいでしょう。貴様の言ったとおり本気でくとしましょう」

「来い」

男の言葉に対して薪は身体を半身にして右手を前に出して構えを取った。その態度に男は怪訝そうな表情をした。

「先程までとは違うのがわからないのですか？」

姿を隠すために使っていた眞稀を解除して攻撃のほうに注ぐ事でその力を増大させる、のだろう。そういうことだとは思うが、穂琥には全くそれがわからなかった。きっとそれを露見したら殺されるかもしれない、薪に。そんな事を思っていると薪は男の言葉に答えて姿を変えると言い、話を進めていた。姿を変える、といっても別に鬼のように形相が変わるというわけではない。服装の転換といったほうがきっとわかりやすい。普段は地球に住んでいる人間と同じ、つまりは洋服を身につけているがこういう戦闘においては眞匏祇としての服装でなければ戦うにも戦いづらい。

そもそも服装の転換はただ単に動きやすいとか慣れているとかそんな小もないことではない。普段、地球にいるときは地球の服装に合わせるのはまぁ、当然のことだろう。しかし、その地球での衣服の場合は制御が大幅に成されている状態になる。つまり、服装の転換をすることでその制限している力を解放するということだ。ちなみにこの服装の転換、つまりは力の解放を替装（ていしょう）と呼んでいる。そうやって替装によって眞匏祇の世界にいるときと同じ格好をすることで相手を熨す力を有するのだ。

そうして薪が替装を終えてふっと落ち着いたのを見て穂琥は自分の目を疑う。普段、眞匏祇の世界にいるときに着ている服装ではない。そのことを疑問に声を漏らすと薪が凄まじい勢いで睨んできて穂琥は苦笑いをして身を引くのだった。

男が勢いよく薪に刀を振り下ろした。薪はそれを後ろに飛び跳ねて避けると舌打ちをした。

「いきなり突っ込んでくるなよな」

「そんなに甘くは無い世界でしょう？それに貴様、替装したにも関わらず力に変化が無いではないか？もとより弱ったのですか？それなのにあんなに豪語するとは愚かですね」

男の言葉に薪は僅かに嘲るように笑った。その笑みに男は酷く怒りを覚えたようだったが薪の次の行動にその怒りも一気に冷めるのだった。

第二話　信頼を得た人間

替装して変わった格好には手首にリングが着いていた。それを薪は引き千切る様に取る。それをしてからの薪が放った眞稀に男は圧倒された。しかし穂琥にはその眞稀の強さがよくわからない。きっと普段から薪の眞稀に慣れているということと薪が男にしかその眞稀を放っていないことが原因しているのだろうけれど。きっとこれも薪にばれたらただではすまないので黙っていることにする穂琥だった。

男が軽く震えているのを見ながら薪がため息混じりに理解できていない男に説明をくれてやる。

「オレはね、諸事情によって替装しても直ぐに力が増大しないようにセットされているんだよ。このリングによってね。だからコイツを外さないとほとんど意味が無いのさ」

引き千切ったリングを掌に載せて男に見せる。男は口惜しそうな顔をして黙っていた。そして薪が体制を変えて男へ突進する。その速さときたら穂琥には目で追うのがやっとだった。

「主の下へ帰らねば！」

男はそう叫ぶと地面を抉って薪の視界の邪魔をした。ブレーキをかけて薪は止まる。土埃が収まったとき、男の姿はなかった。

「あ～あ、逃がしちゃった。珍しいね？そんなミスするの」

穂琥が薪の元によって嫌味を篭めて言ってみたが思いの他自体は軽

くないことを穂琥は薪の表情から悟った。

「こうやって姿を消すときっていうのは眞稀を使う。だからそれなりの感知能力があれば追う事が不可能なわけではないんだよ」

「だったら追えば良いじゃない？」

「出来たら既にしている」

薪の放った言葉。眞稀を完全に消されてしまっているせいでその後を追う事が出来ない事実。

「主、か・・・。気になるな」

薪がぼそりと言った。そんな薪に穂琥はふと疑問を覚える。薪は慤夸だ。今更ながら慤夸だ。現実世界に慤夸より強い眞匏祇は存在しないはず。なのにその慤夸である薪を凌いで眞稀を操るものがいるのだろうか。

「薪は・・・どのくらい力をセーブしたの？」

「あの男に対してか？追跡に対してか？ま、どちらにしろどちらも全力に近い感じでやったんだけどな」

穂琥はその薪の返答に少し不貞腐れた。そういうことが聞きたいんじゃない。

眞匏祇は人間とは比べ物にならないくらい強い。そんな事言われなくたってわかる。つまりそんな眞匏祇がこの世界で大暴れするわけにもいかず薪たちは力を強制的に抑えてここにある。その地球での根本的なセーブがどのくらいかと聞きたかったのだ。とはいえ、襲ってくる側がセーブしているかは知らないことだが。

「眞匏祇のところにいる時と今との違いを聞いたのか。なるほど。そうだなぁ～。考えたこと無いから知らないな。適当だからな、いつも。感覚でこのくらいってね。ま、あえて言うなら１０分の１も無いんじゃないか？」

ケロッと言った薪のその言葉に穂琥は頬を吊り上げた。そんな嬉しそうな顔をした穂琥に薪は首を傾げるのだった。

兎に角、一度落ち着いたのでもしかしたらまだいるかもしれない籐下と獅場の元へ帰ることにした。

戻ればそこにちゃんと待っている籐下がいた。どうやら獅場のほうは学校での宿題が山積みらしく仕方なく萎れて帰って行ったらしい。そんな事をまるで聞かずに穂琥は自分の世界でにやりと笑っていた。

確かに今回、敵を逃がしてしまったがそれは相手が薪に対して恐怖し怯え、逃げ去ったのだ。普段の欠片も力を出すことの出来ない薪に。よかった、薪はやっぱり強いんだ。そんな事を思って笑っていた穂琥の耳に思いがけない言葉が飛び込んできて思わず現実世界に帰ってくるのだった。

「さて。話もしないとな。籐下、来い」

「あぁ」

穂琥は耳を疑う。いや、待て待て。今後の話しとかもあるのだから人間である籐下を連れていては話に支障をきたすだろう。積もる話とかもあるだろうけれど今はそれ所では無いことを薪が一番よく知っている筈なのに。

疑問の表情を浮かべて薪にその疑問を言葉を使わずになんとか投げかけると薪はそれをキャッチしてあっさりとその回答を述べる。

「だって籐下は知っているから」

「・・・・・・へ？」

思いも寄らない薪の言葉に穂琥は硬直なんてものではなかった。

「あれ？薪、そのこと穂琥ちゃんに言っていなかったの？可哀想でしょ。オレね、穂琥ちゃんたちが『向こう』に行く前に薪から聞いたんだ」

少し困ったような表情を浮かべながら籐下が語った。薪が、あの薪が！ここまで人に対して信頼をしていることが意外に思えた。

薪の掛け声でともかく移動をすることにする。宿を探していて穂琥に阻害されていたことを思い出して薪はため息をついていた。しかし、ここは以前、薪と穂琥が住んでいた場所であって住まう場所が無いわけではなかった。無論、穂琥の家は残ってない。アパートのような所を借りていたわけだから既にそこは開いているはずもない。しかし、薪のほうは一軒家を持っていたし、何かあった時用にと売却はしないでそのままで取っておいてあるはずだった。よってその薪の家まで向うことになった。

当然のように薪の家はそこにあった。これでひとまず落ち着くことが出来るということで中に入ってひとまず休息、寛いで。一息つくと籐下が少し怪訝な表情で薪に尋ねる。

「何をしに戻ってきたんだ？よほどの事がない限り戻らないって言

っていた気がしたんだけど?再会は嬉しいけどそれが気がかりでさ」
「眞匏祇の世界の・・・宝、かな。宝探しをしに来た」
薪の誤魔化すような言い方に籐下はむっとしたような顔になったがどこか納得したようだった。それにしても籐下相手に、普通に『眞匏祇』という単語を使ったので穂琥は目が遠くなった。

籐下の質問で何故眞匏祇たちが襲い掛かってくるかということを今更ながらに知った穂琥だった。

地球という小さな鳥篭の中で育った白鳥。その飛び方も駆け方も何も知らない。そんな白鳥が突然籠を飛び出して大空へと舞い上がる。手を引いてくれるものと一緒に。精一杯その翼を羽ばたかせて飛び続ける哀れな白鳥。美しく飛ぶ方法を知らない危うい白鳥は外敵に狙われてその命を危険に晒す羽目になる。一生懸命羽ばたくその翼の音は自らの位置を外敵へと知らせる。飛び方が危ういものに強いものはいない。しとめるのは簡単なこと。その美しき白い翼を紅く染めることは容易いことなのだ。

眞稀のコントロールがうまく出来ない穂琥はそうやって他の眞匏祇たちに自らの位置を知らせてしまう。この地球にもとより住まう者たちにとって新たな眞匏祇の来訪はただ単に己らの命を脅かす存在にしかなりえない。故に、やられる前にやる。

「ま、そういうわけで穂琥はほっとけば簡単にくたばるから護ってやらねーといけないわけだ」
「なるほど・・・」
「でも私、白鳥か〜・・・きれいだぁ〜」
「いや、あくまで大きさの例えだからな。お前は頑張って飛べてもアヒル止まりだ」

「酷い！それ！」
文句を言いながら薪の頭をぽかぽか叩く穂琥を他所に薪は何事も無いかのように話を進める。
「そんなわけでこっちに来てから随分と忙しい思いをさせられてきたんだよね」
「そっか。穂琥ちゃんってそんなに大変な状態だったんだ。人間を危険に晒すわけにはいかないからさっき走ってどっか行っちゃったわけか？」
「おう、そうだよ。よくわかってんじゃん」
穂琥も薪も人間ある籐下が眞匏祇である穂琥よりも物事の理解能力に長けているような気がしてならないと思うのであった。
　そんな事を互いに思考していればそれを読みあって穂琥が薪を殴りにかかる。そんな状態を見て籐下は過去の薪と穂琥を思い出す。過去、といっても半年も経っていないようなそんな位だが、薪の雰囲気の変化に少々驚いた。薪は実際もっと棘のある性格だったような気がするが今はその棘があまり感じられないような気がしていた籐下だった。
「何？」
籐下の視線に気づいて薪が尋ねる。籐下は少し悩んでから発言する。
「いや、まぁ。その、なんとなく丸くなった気がして」
「そうか？ん～。いや、元からこんなだけどなぁ。表に出さなかっただけだと思うけど」

薪は神妙な表情で笑って答えた。薪の内心ではこうして感情を表に出すようになって来たのは眞匏祇の方でいろいろあったことを含め、儒楠の影響があるような気がしていた。

穂琥が突然空腹を訴えて冷蔵庫を漁る為に部屋を出て行った。その図太さに籐下は苦笑いをした。離れる前はもっと慎ましやかな女性であったような気がするのだけれど。籐下はそんな穂琥の背を見て薪との関係性に疑問を覚えた。

「穂琥ちゃんとさ、薪って。学校にいたときはなんか突然妙に仲良さげにしていたし、薪も他の女の子に対する態度とはまったく別の態度を取っていたからてっきり付き合い始めたのかとか思っていたけど、違うな」

「なんだよ、突然。まぁ、そうだろう。付き合っちゃいないしもとより誰とも付き合うつもりもねぇし。ちゃんと考えてみればわかるって」

薪はさもどうでもよさそうに答えた。確かに薪はそういうことに疎いから当分そう言った感情を有することは無いんだろうなと呑気なことを思う籐下だったが、では何だ。この二人の関係は。

「一体何？同じ眞匏祇だからそんなに仲いいのか？」

「たかが同じ種族だからってここまで必死になって護ろうとはしねぇよ。そんなにオレは暇じゃない」

薪の言った言葉の意味を籐下はまだわからない。薪の性格上、護ることができるものなら全てを全力を以って護るはず。それでも暇が無いからそんな事をしている場合ではないと言う薪の言葉の真意は簡単なこと。薪は慤夸だ。慤夸が誰構わず手を差し伸べるという行為は簡単な話ではない。数が多すぎてそれこそどの手に差し伸べれ

ばいいのかわからなくなってしまう。しかし、薪とてそれを無視しているわけではない。慤夸になってもまだ未熟さが多くあるからなんともいえないが、薪の慤夸としての最終目標は恨むことのない世界。そんな世界が本当にあるとしたらそこは神の世界か何かか。そんな風に思うけれど極力それに近い世界を作ること。それが薪の目標、せめてもの償い。

話が反れたが、ともかく籐下は薪が慤夸であることまでは知らない。故に疑問を覚える場面は多々出てくることだろう。

「で？どういう関係なんだ？」

「双子の妹だよ、あのバカは」

それを聞いて驚愕した籐下。

驚くのも無理は無い。そもそも学校に転入してきた穂琥は最初薪のことなど欠片も知らなかった。もし、兄妹であるというのならそのときに感動の再会をしてもおかしくない。

「オレらは眞匏祗だ。記憶の改ざんくらいできる。それにそうやって記憶を失ったどこにいるかもわからない妹を探すのが前回、地球に行ったオレの本当の目的」

そう語る薪の言葉を聞いて確かに納得できる節が多くある。妙に仲良くなりだしたのもきっとその記憶とやらが戻ったことが理由だと考えれば納得できるし、他の女の子に対する態度と異なった態度を取る薪にも合点がいく。なるほどなるほどと納得している籐下の頭を薪が突然鷲掴みにして地面に叩きつけたので籐下は酷く驚いたが視界の隅に鋭く光る槍のようなものが見えたのでぞっとした。

薪が籐下の頭から手を離したので頭を上げて振り返ると槍のようなものが壁に当たったらしく人一人包めるくらいの大穴を明けているのを目にした。

「悪いな、口で言うより早いと思った」

「い、いや・・・護ってくれてありがとう・・・」

よくわからないけれどそれだけは理解できたので謝礼の言葉を述べる。

薪は籐下の周りにドームのようなものを作るとその中に居れば多少はもつからと言って穂琥のほうへ走っていった。残された籐下はあまりの状況に驚きすぎて呼吸すら忘れてしまいそうだった。そしてそれと同時に眞匏祗という危険性を認識した。聞いただけでは全くわからなかったことだが、薪が全力をかけて穂琥を護ろうとする意味がなんとなくわかった気がした。一瞬でも気づくのが遅れれば籐下の頭はあの槍のようなものに粉砕されていた。そんな命のやり取り。少しも気を抜けない恐怖の世界。それを同じ年の少年と少女が身を置いている。目の前にいる。それがなんとも言えず・・・・。

台所であたふたしている穂琥に駆け寄ってひとまず穂琥が無事であることを確認する。

「よかった。来い、退治しに行くぞ。籐下も居るから早いとこ片付けないとな」

「うん！」

穂琥は薪の背を追って駆け出した。

目の前に立つ男女。その風貌からしてどう考えても人間ではない。

「こんな愚図を潰すのにあいつは戸惑ったわけ？」
女が甲高い声を上げる。男は黙って目の前のものを見据える。
「こんなしょぼい結界しか作れないようなヤツにアイツはすごすご負けて帰ってきたって言うの？」
「触らないほうがいい」
目の前の男女が何であるせよ、会話していることを聞く限り、薪たちにとって敵であることを意識させられた籐下。そして男の忠告を他所に女は籐下の周りに張られているシールドに触れる。すると女は数メートル後ろに吹っ飛んだ。
「だから言っただろう。雫杜（だと）がそこまで弱い奴ではない事位知っているだろう」
「っさいわね！私より弱ければ皆同じよ！それに比べて・・・。今回の彼は敵ながら惚れちゃいそうね～」
女は頬に手を当ててうっとりとした表情を浮かべた。先程、吹っ飛んだときに出来た傷ももう癒えている。眞匏祇ならばこれが普通なのだろうか。その辺のことは全くわからない籐下はただ、今あるこの状況下で生きていられるかの方が重大であった。
男女は籐下から目を離すとあらぬ方向に目を向けた。そうしている二人の会話で眞稀を隠していないとか、その方が抹殺しやすいとか言っているとなるとおそらく薪と穂琥のことを言っているのだと理解できた。
女はやたらと嬉しそうな顔をしながら男に行ってもいいのか訪ね

ていた。男のほうはそれを肯定していた。すると女はさらに嬉しそうになり、にたっと気味の悪い笑みを浮かべるとその場からぱっと消えた。男は籐下のほうを見下ろして言った。

「運が良かったのだよ、君は。いや、悪かったのかな」

そういうと男はその場から消えた。籐下はただ黙して薪たちが帰ってくるのを待つことしか出来なかった。

第三話　影に隠れた存在

「追って来るな・・・」

走り続けてやっと止まったところで薪が言った。先程、家を襲撃してきた眞匏祇から人間を放すべく走り戦える場所まで移動して自分たちの存在はここにあると眞稀を放つ。それで向こうが此方に来てくれるなら文句は無い。文句が無いはずなのに。

「ダメなの？」

穂琥の疑問の声が上がる。薪は小さく唸る。わかってはいる。来てくれることに関してそれが狙いで誘っているのだから。ただ、相手が素直にその誘いの乗りすぎているような不安もない事もない。穂琥はいいほうに考えよう？と囁く。それに薪は頷く。

女がすっと舞い降りる。その後に男が降りる。感覚からしてこの二祇であっている。

「急ぎすぎだ、眞稀を無駄に使うな」
「だってぇ。早く会いたいんだもの」

女はきゃいきゃいとはしゃいでいる。男のほうはため息をつく。

「雫杜が世話になったな」
「だと？・・・あぁ、この間の男か？」
「名乗らなかったの、あのバカ！」

女が急に話に参加する。

「私は誓茄（せいな）、よろしくね！天才の眞匏祇さん♪」
「我が名は鼓斗（ごと）」
「へぇ」

薪は警戒したように相槌を打つ。特に誓茄の言った言葉のときの薪の表情には萎縮した穂琥だった。なんだか一瞬、怒ったような気がした。

「相手に名乗らせ己は名乗らぬか」
「・・・そっちが勝手に名乗ったんだろう？認めてもいないどこぞの眞匏祇に名を言う筋合いは無いな」
「きゃっ！いいわね！ますます気にいちゃった！」

薪が名前を伏せたのはきっとそういうことではない。いや、もちろんそう言ったことも含まれるのだろうけれど。眞匏祇の慤夸である以上、その名を明かしてはいけないのだろう。だからそれは同時に穂琥も同じことだった。

「さて。戦わないとならないのか？」

腰に手を当てて薪が呆れたように言った。鼓斗はそれを当然だと肯定する。理由を薪が問うと鼓斗の言葉を阻害して誓茄が割り込んだ。

「ちょっと！気に入った子とは話がしたいの！私に喋らせて！」

薪が力を抜くように肩を落として誓茄の話に耳を傾ける。しかし、誓茄は薪が求めた回答をくれるような話をしてはくれなかった。話すのはただ、眞稀をコントロールできるという薪の性能について語るだけ。

「理由が聞きたいんだ」

薪が誓茄の話を区切って言うと誓茄はそれをむっとする様子も見せずむしろ嬉しそうにせっかちね、と笑う。そんな誓茄は視界の中から消える。

何が起きたかは一瞬ではわからなかった。目の前で怒りを見せる薪の表情とさらに嬉しそうになった誓茄の表情が見えるだけ。

誓茄は穂琥に牙をむいた。穂琥を斬り殺そうとした。しかし、それを薪が許すわけも無く、見事に誓茄の刀を振り払う。

「凄い！替装しないで刀を出せるのね！私たちの中でも数少ないわ～！」

突然穂琥に攻撃を仕掛けた理由はおそらく、薪に刀を抜かせるためと、叩かなければならない理由を穂琥が知る必要も無く、そもそも存在自体が必要ないと判断したからだろう。

誓茄はただひたすら薪のその強さに惚れ込んだらしく浮かれた声を出す。その声が穂琥の耳には耳障りで仕方なかった。

「さぁて。そこの娘を私たちに預けてくれないかな？安心して、傷付けやしないわ。あなたに来てもらいたいだけなの、我らの主の下に」

「誓茄。それは早すぎだ。もっと情報を・・」

「構わないわ！それくらいであの方の『シナリオ』は崩れたりしないわ」

誓茄と鼓斗が軽い言い争いを始めた。段階がまだ早いと訴える鼓斗に対して支障はないと豪語する誓茄。誓茄の場合は感情論で筋がない。よって鼓斗の言葉で誓茄は唇を噛むことになる。

「主の『シナリオ』を崩すなど我らには出来はしないが、奴には出来るぞ。その位の力を有している。お前がそれは一番わかっているのではないか？故に惚れたのだろう？」

押し黙る誓茄。鼓斗は警戒したような顔をいている。その様子をただ見ているだけの薪と穂琥。しかし、いい加減に薪の痺れも切れてきた。

「さて」

突然発せられた薪の言葉と眞稀。それに驚いた誓茄と鼓斗は息を呑むようにして薪のほうに目を動かした。

「話はその辺でいいか？そろそろ終いにしたいんだけど」

薪の言葉にかなりの警戒を抱いたらしい鼓斗は不服そうな表情をしつつも引くことを決めたようだった。しかし、それに喰らい付いたのは誓茄だった。

「面倒だな。お前らの言う主とやらがどんな奴かは知らんが。お前らが着くほどの眞匏祇だ、相当できるんだろう？そしてそんな主が作った『シナリオ』とやらがそう簡単に崩れるとはオレには思えにくい。お前ら二祇を今ここで倒したところできっと何の支障も出ないだろうとオレは思うわけだ」

薪の言葉に鼓斗も誓茄も硬直した。一度も会っていない主と呼ぶ者

の強さと力量を直感で理解し、それを口にする。

「今、引くというのなら追うつもりは無いから行け。ただし、一戦交える、はたまたこの女を連れて行こうというのならオレは申し訳ないが本気を出す」

薪の言い切った言葉に誓茄が、喰らい付こうとしたがそれを鼓斗が遮り引くことを要求する。しかし、鼓斗としてはすんなり引かせることが腑に落ちないようだった。

「家に友を閉じ込めているしな。それにお前たちみたいな奴との戦闘は極力避けたい。この地球が壊れてしまう」

鼓斗は納得いったように頷くと小さく笑ってから誓茄を宥めてその場から消えた。誓茄は薪を恨めしい目で見てから姿を消した。

やっとまともに会話が出来る。穂琥は薪に傍に駆け寄ってそっと薪の背に手を置く。

「昔、まだあの方の支配下にあったとき、罪を犯したものは絶対殺された。それから逃れようとして地球に足を運んだ」

穂琥が尋ねる前に薪は語りだした。それが嬉しいような複雑なような穂琥だった。

さすがの慤夸といえど、さすがの巧伎といえど地球まで逃れた眞匏祇を追ってまで殺すつもりは無かったらしい。何より面倒だった。地球に逃れたければ逃れればいいと巧伎は割り振っていた。

そもそも眞匏祇にとって人間に対しする負の感情は深い。人間を

毛嫌いし抹殺したいと願う程に。しかし流石の眞匏祇といえどこの地球に住まう人間全てを消し去る力を有しているわけではない。もっとも、慤夸なら別の話しだが。
よって地球に逃れた眞匏祇は結局嫌う人間の元生活しなければ習いために苦痛であることに変わりは無かった。さらに眞匏祇の世界から人間の世界に行くことは容易くできても戻ってくることは容易ではない。故に、わざわざその反乱分子を殺しに地球に赴く理由などなかった。

そして厄介なのがここから。殺されることを恐怖に思って逃げてきた眞匏祇たちは大抵心弱く、この地球に足を踏み入れた眞匏祇を片っ端から消していこうとする。慤夸の追撃ではないかという不安から。だから不安定に発している穂琥の眞稀を感知すると襲ってくるのだ。さらに面倒なのは先程の連中だ。

決してそんな弱い存在には思えないのにも理由がある。ただ逃げることを選んだ先程の眞匏祇の話とは異なり、こちらの眞匏祇は慤夸に対する憎しみが強い。必ず噛み付くに戻るという意気込み。それがあるからこそ、普通の眞匏祇よりもはるかに強い力を有していることになる。慤夸に復習するために存在している集団。それの一員が先程の誓茄と鼓斗、さらには雫杜ということだ。

そして問題なのは薪が慤夸であるかどうかを知っているか否か。鼓斗と誓茄は気づいていないことは事実。もし、慤夸と知っているならあんな口調、態度ではないはず。しかし、彼らが『主』と呼んでいたものがどうかは流石の薪とて理解は出来ない。

そんな話を家に帰りがてら穂琥にしていた薪だった。そんな家には途方にくれた籐下が待っていた。そんな籐下を包んでいたシールドを開放する。やっと身体を動かせるようになった籐下はうんと身

体を伸ばした。

「悪いな、籐下。無理させた」
「いや、そんな事ないよ。助かったよ」
「さて、籐下。とりあえず今日はもう帰れ」
「・・・わかった。無理するなよ、色々さ
「おう」

籐下は少し薪の顔をのぞき見てから諦めたようにその瞳を伏せて帰って行った。

籐下を送った後に薪は気合を入れるようによしと声を掛けた。それに驚いた穂琥は薪を凝視する。

「少し移動するぞ。遠いから覚悟しろ」

薪にそういわれてぎょっとしたが移動術を使うといったので特に穂琥にすることは無いと悟る。なんたって穂琥にはその技は使えないのだから。それにしてもどこに行くのかは見当も付かない。穂琥はそれでも薪の後を着いてく。不安なんて全く無いから。

第四話　愁夸と人間の繋がり

ふわっと浮いた気持ちの悪い感覚。これが移動術の特徴。全く別の場所へ移動できる技。気持ちの悪い浮遊感が終わってやっと地面に足が着く。そうして目の前に広がる広大な土地と屋敷。一体ここはどこだ？

「ここって・・・何！？」

「入ればわかるんじゃないか？」

薪はしれっとした顔をしてさっさと歩き始める。穂琥はそれに習うしか出来なくて薪の後を着いていく。

薪はその広大な土地にずかずかと入り込んでいく。中に入ると警察のような格好をしたものが鋭く睨んできた。しかし薪はそれすら気にする様子も無くどんどん進んでいくが、その警察のようなものが近寄ってきて問い詰める。

「君達！ここは君たちが入って良い様な場所ではないぞ！帰りなさい！」

荒れの滲むその声には怒りというより警戒だった。確かにこの場は他の場所に無いどこか神聖な気配を匂わせてはいるが、穂琥には一体ここがどこなのかは知らない。その警察のような男性は薪の腕を掴む。

「君！」

その声に流石に薪は反応を示してため息をついた。男性の目の前に

手帳のようなものを押し付ける。それを一瞬だけ如何わしい表情をした後、はっとした顔をしてから薪の顔とその手帳とを見比べた。それからいまだに不信感の残る顔のまま通ることを受諾した。

穂琥はその手帳に疑問はあまり持たなかった。薪は眞匏祇で、ここは地球。人間の住まう場所。人間の世界に『まほう』なんて存在しない。故にそんな『何処にでも入ることが出来る券』などというものを簡単に入手できなくて当然ではあるが、眞匏祇である以上それらの『偽装』は簡単に出来る。が、薪の行動には疑問を覚えた。薪はあまりこういった無理強いするような行為はしない。よって、偽装するなんて如何わしい行為をするとはとても思えないからだ。

「ねぇ、薪。さっきの手帳って何・・・？なんだか怪しい・・・」
「大したものじゃねぇよ、オレら眞匏祇にしてみれば」

そう言って薪は手帳を穂琥に渡してくれた。手帳といっても中身は紙があるわけではなく、何かの紋章のようなものが描かれているだけだった。どちらかというと警察手帳のようにも思えた。紋章が違うけれど。

進んでいくとそれはまぁ、大きな屋敷が見える。薪は何のためらいも無くその中に入っていく。流石に穂琥も焦って身を萎縮させた。中に入ると脇に小さな扉がある。その扉に入るとそこは人が2、3人入ることが出来るか出来ないか位の小さな空間だった。

「ここ、何？何をする場所なの？」
「空間移動をする場所だ」
「・・・へ？」

人間の造った施設にそんなものが存在するわけも無い。しかし薪は

そこで移動術を行使して全く同じ場所へ移動する。

そこの扉を開けるとそこには美しい女性がいた。穂琥はその女性に一瞬見とれてその後に目を大きく見開いた。その女性を穂琥は知っている。そしてどんな女性かを知っている。故に驚いたのだ。そして彼女のほうもとても驚いているようだった。驚き具合では両者とも引け劣ることは無かった。そんな中に響いた張りのある声。

「急な訪問をお許しください」

薪の声を聞いて女性は驚いた表情から通常の表情へと戻した。それから一体何をしに来たのかを尋ねる。その声は少しだけ震えていた。

「まずはこれ、証明書を」

薪は先程の警察のようなものに見せた手帳をその女性に見せる。女性は顔の奥で震えを見せた。しかし表には決してその様子を出さない。気丈な女性だと穂琥は感じた。それでも彼女の顔は蒼白になっていた。

「そ、それで今回は何用で・・・？」

彼女は礼儀正しく起立して薪に向う。薪も同じ様に起立して向う。硬くなっている女性に薪はそっと笑いかける。

「そんなに硬くならなくても。父上は少し異常でしただけです。今回危害を加えるようなことはいたしません」

そっと話した薪の言葉に彼女は少しだけ安どの表情を見せた。

安堵した彼女とは裏腹に穂琥は衝撃を受けて仕方なかった。
彼女は間違うことなく人間だ。その彼女に薪は『父は』と語った。つまりは薪の父を知っていることになる。そして今の薪とは異なり、父、つまり巧伎が眞匏祗であることを隠して彼女と接したとはとても思えない。

「巧伎様は・・・？」
「・・・他界した。随分と前に。それの報告を兼ねてここへ来させてもらいました。遅くなってしまったことをお詫びします」
「い、いいえ・・・」
彼女の瞳は揺れていた。

まさか人間とこんな関わりを持っていたというのか。驚きでしょうがない。巧伎がこの女性を殺さなかったことが少し意外にも思えるほど、彼女の権力は相当強い、はずだ。慤夸を前にすればかすんでしまうけれど、この地球にとっては相当な権力。

「あの、陛下。失礼致し・・・客人ですか・・・？」
部屋に入ってきた一人の男性。
名前を確か、貴船小夜（きふねさよ）と言った。この女性は何を隠そう、この地球のトップ所有者、天皇陛下というわけになる。
入ってきた男性を小夜は何とか宥めて部屋から追い出した。薪は申し訳ないと謝罪の言葉を述べるが小夜は必死でそれを否定する。
「いえ、貴方様が悪いわけではありませんので」

小夜の敬語に一瞬だけ薪は不機嫌そうな顔をしたが直ぐに戻した。もとより彼女は敬語を使用する立場の人間なのだから当然だ。相手が慇夸であろうが何であろうが関係ないということを思い出す。

「それで。何用でしょう？」

最初よりは大分落ち着いたその声に薪は安心したような顔をしていた。

「痲臨という危険な宝玉が此方に来てしまって。それを回収するのが今回この地球にお邪魔させていただき理由です」

小夜は痲臨と言う言葉を聞いて目を丸くした。別にその言葉を知らないわけでは無さそうだった。とすると、おそらく巧伎からの情報を与えられているのだろう。

「それの回収作業をするので多少なりともこの地球の軸が揺らぐかもしれませんが、揺らいだぶんはしっかりと元に戻しますので」

小夜は納得したように美しく頷く。

それに反して穂琥はそろそろ我慢の限界に達していた。

「薪！一体何？！天皇陛下だよ！？この世界のトップだよ！？っていうか人間だよ？！何考えているの！？」

「何も考えていないお前には言われたくない台詞だな」

「酷い！」

突然話に乱入してきた穂琥に小夜は酷く驚いていた。まるで今までその存在に気づかなかったみたいに。震える声で穂琥が何であるの

かを尋ねてきた。

「私は穂琥です！ホク＝スィンス＝トゥウェルブ！薪の妹です！」

陽気に答える穂琥に少し面食らったように頷いていた。

「さて、お忙しいところ時間を頂いてしまって申し訳なかった。ではまた来ます。その時は良い報告を持って」

小夜はその言葉にはっとしたように深々と頭を下げた。そうして薪と穂琥はきたところから帰るのだった。

「薪様・・・、ですか。慤夸もお変わりになられるのですね・・・。巧伎様と異なり素晴らしい方です・・・」

小夜は一人になった部屋でそう呟いた。

穂琥はひたすら薪に投げかける。人間ともそんなかかわりがあるなんて知らなかった。しかも相手は天皇陛下ときたら驚きだ。しかし、薪はさらりと凄いことを言ってのける。

「ま、所詮天皇だしなぁ。慤夸なんかを前にしたらまだまだ小さい存在だよ」

本当に我が兄ながら一体何処までコイツは・・・。穂琥は小さくため息をつく。ここに来てより薪を遠く感じた穂琥だった。

そんな薪はこの皇居に危害が及ばないように普通には見えない特殊なシールドを張った。これでおそらく、相当の手誰が登場しない限りここに手を出すことは出来ないだろう。

皇居を出ると穂琥は鋭く肌を刺す殺気に似た眞稀を感じた。それを薪に伝えると少しやわらかい笑みを向けてきた。

「そういうの、分かるようになったんだなぁ～」

「なんか腹立つ！それ所じゃないでしょ？！」

「はいはい」

妹のちょっとした成長を噛み締めながら薪は足に眞稀をためる。穂琥がその行為に疑問を感じている間に、薪はさっと穂琥を抱えて空へと飛び上がるのだった。無論、穂琥の大絶叫をおまけして。

第五話　新たな幕開け

今感知した眞稀は全部で４つ。つまり４祇いるということになる。

穂琥を連れて薪は敵の待つ場所へたどり着く。誓茄と他にも女が一祇と男が二祇いる。見覚えの無い顔ぶれだった。

「何用だ？」

薪の言葉に誓茄は嬉しそうに微笑んだ。

「何、こいつら。強いの？」

誓茄の隣に立った女が嫌そうな声を上げた。誓茄はそれを聞くと自慢層にお気に入りだと鼻を鳴らした。そのやり取りを見て薪は肩を落とす。

「へぇ！鼓斗と戦うのを拒否したっていうやつか？！」

その後ろにいた男が感嘆の声を上げる。さらにその後ろにいる男は此方を睨むようにして押し黙っている。

女の名前は圭（けい）、男の方は流貴（るき）。ずっと黙って言葉を発していない男が瞑（べい）。誓茄は相変わらず腕を組んでにやりと笑っているが、圭は戦闘態勢に移ったので薪は目をすっと細める。

「やるのか？」

「おい！？この数を前にしてやる気なのか？大したものだな！？」

薪の言葉に流貴が反応を示した。薪のその強気は圭に買われたが結局、やらるのは薪であると圭は豪語した。

「っつても戦闘するつもりは無い。『シナリオ』とは異なるからな」

圭が額に力を入れて言う。相変わらず誓茄は信徒の一戦を交えたくてうずうずしているようでさすがの圭もその様子を不思議に思ったらしく、そんなに気に入ったのかと尋ねた。

「えぇ！強いわよ～！」

「・・・・・。一戦、やりたいな」

圭の言葉。それに流貴は驚いたようにやるのかと聞いた。そうやって騒いでいる中に穂琥が少し怯えているのを薪は感じた。

穂琥の瞳に映る４祇の眞匏祇たち。そのうち、一つだけ特殊な存在を感じる。本来、眞匏祇は眞稀を完全に消して気配を消すことは出来ない。薪とて眞稀を最小限に抑えていて普通の眞匏祇にとってはまるで消えているように感じるだけのこと。桃眼で視れば眞稀を視る事は案外容易くできる。

しかし。たった一祇。根本的に眞稀を見ることができないものがいる。そのものに対して酷く怯える穂琥。そして様子から察するに薪もそれに気づいているようにも思えた。

「あんた、名は？」

低く、重たい声。まるでそれは鉛のように。その声が響いたとき、さっきまで騒いでいた誓茄や圭、流貴は押し黙った。

声を発したのは瞑。眞稀を見ることの出来ないもの。その瞑に名乗ることは出来ないと答える薪。すると瞑は薪を一度鋭く視てから視線を外した。

「名は？」

再び問う。薪はその瞑の言葉に何故か焦りを感じた。一体何故自分が焦ったのか理解することすら出来ないほど、妙に焦ってしまっていた。

「断ると、言ったはずだが？」

「何故語らぬ？」

「・・・語れぬ理由があるからだ」

薪の言葉全てで瞑はまるで何もかもを見据えていそうな気がしてならなかった。

一方の、誓茄たちは正直驚きで言葉を失っていた。滅多に声を発しない瞑だが、今、目の前にいる少年に興味を持って話しかけていることが意外で仕方なかったのだ。普段から全く喋らず実際、声を聞いたのだってこの長いときの中で2、3度といっても過言ではない。そうだというのにここまで語っているとは驚く以外に無かった。

瞑は軽蔑するように薪を睨んだ。しかしその後に目を伏せて呟くように言う。

「エンドと同じ『気』を感じたが。気のせいか」

薪はその言葉に全身に鳥肌が立った。自分の奥からこみ上げくるものは何だ。驚きか。いや、きっと違う。これは悲しみと憎しみ。そ

してそう感じた自分に怒りが沸く。

瞑はそのまま喋らなくなった。薪はそんな瞑を凝視する。しかし、瞑はもう言葉を発する気は無いようだった。

「あの、瞑、さん？」

穂琥が急に会話に参加した。薪は驚いて穂琥に振り返る。穂琥の瞳に残る眞稀を感知して僅かにでも開眼したことを知る。

「貴方、一体なんですか？『何』ですか？」

穂琥の質問に瞑は不機嫌そうに顔を歪めた。しかしやはり何も言わない。瞑の中で既にもう何も言う必要がないと判断したのだろう。

その異様な空気に気圧されていたのは何も薪だけではない。当然、瞑と共にここにいた他の3祇もダメージを受けているようで若干の狼狽した様子を見せていた。

「引いてもらえないか？」

薪の声に賛同するように流貴が声を張る。

「おし、ここは引こう！一度戻って体制を立て直そうじゃないか？！」

それに同意する誓茄と圭。無論、瞑も引くつもりのようだった。少しだけ安堵する薪。しかし、瞑がふっと薪を睨む。薪はその目に一瞬だけ心臓を貫かれる感覚を覚えた。前にどこかでそれに似た何かを感じたことがあるような。

「あんたと遣り合う時を待っているよ」
先程までの話の中で一番重たいその声にぞっとする薪。本能が告げる。この男は交えてはいけない、何があっても、と。
そうして彼らは姿を消した。全身から力を抜いた薪は腰を下ろす。そしてどっと疲れた息を吐ききってから穂琥に投げかける。
「なんであんなこと聞いた？」
「ご、ゴメン・・・。でも気になって・・・。だって・・・だって眞匏祇じゃないよ！アイツ、何！？だって！！」
「落ち着けって」
薪の宥めるような声に穂琥は黙る。穂琥のいっていることはおそらく事実だ。眞匏祇であるのに桃眼ですら眞稀を視る事ができない。それにあの異様な空気。普通の眞匏祇とはとても思えない。
「ねぇ」
神妙な面持ちで穂琥が薪に呼びかける。薪は目だけを穂琥に向けて反応を示した。穂琥は少しだけ黙ってからそっと口を開いた。
「綺邑・・・さんって、眞匏祇とは全く違う生き物だよね？」
「？　当たり前だろう」
穂琥の質問に疑問の表情を浮かべる薪。薪の返答を聞いてさらに押し黙る穂琥の様子を見て、薪ははっとした。
「お、おい・・・？まさ、か・・・」

「い、いや、わからないけど！」

僅かな可能性。しかしその可能性を否定することも出来ないことも事実。綺邑にそのことを尋ねてみても構わないかもしれないが、取り合ってくれるとはとても思えないのが現状。

瞑は死神かもしれない・・・―

第六話　属する世界の違い

帰宅途中の出来事。薪がはたと足を止めた。そしてあらぬ方を見て怪訝な表情を浮かべている。それから穂琥の腕を掴んで着いて来いと走り出す。何が何だかわからないけれど諦めて着いていくことを選ぶ穂琥だった。

とある家の前で薪の足は一度止まった。そしてその家を凝視している。その様子を見ていることしか出来ない穂琥は怪訝な表情を浮かべる。そして薪はその家のインターフォンを押す。しかし、返答は無い。留守なのかと思った穂琥だったが、薪は何も気にしないかのように勝手に家の敷居をまたぎ、玄関の戸を開けてずかずかとその中に入っていったので驚いたなんてものではなかった。

中には頬を濡らした女性がいた。その膝元には白い顔をした男性が横たわっている。見るからに既にその顔に生気は無い。息を引き取った後だろう。

そんな女性にも気にしないように薪はきょろきょろと辺りを見回している。勝手に入ってきた男女にその女性は酷く驚いている様子だった。穂琥はそんな女性に平謝りして何とか薪から意図を聞きだそうとする。

「旦那、か。いつ逝ったんだ？」

薪の言葉に流石の穂琥も怒りが沸いた。大切な人を失った人間にそんな言葉をかけるなんて酷すぎる。しかし、よく見ると薪の目は女性を見ていない。むしろまったく別のところを見ている。それから怪訝な表情になる薪。

「居るんだろう?そこに。出てきても良いだろう。この男に何かあるのか?」

薪が突然喋りだす。穂琥もその女性もチンプンカンプンで硬直する。一体薪は何を言い始めたのだろう。穂琥でもわからないのだ、この女性にそれがわかるわけも無い。穂琥は半ば、薪の頭が壊れてしまったのではないかという不安に駆られた。

「出ないか・・・。この女性の記憶はオレが持つ。いいだろう?」

「ふん」

薪の言葉に呼応するように響いたその声に、女性は酷く驚いて反応する。誰も居ないはずなのに、声が何処からとも無くしたのだから。その声を聞いた穂琥のほうは久しぶりに腹の底からぞっとしたものを感じた。怒りというか、なんというか。前回会った時と同じ様な感覚。儒楠が『嫉妬』と呼んだ感情だ。つまり。今声を発したのはあの『ヒト』だ。

「よう。久しぶり、でもねぇか」

笑いながら薪は言った。

真っ黒いローブのような服。フードを深くかぶり容姿がはっきりと輪郭取ることが難しいそれは横たわる男性の脇に現れた。

「貴様の助力をする為に居るのでは無いぞ」

男か女か、わかりづらいその声音と口調だが列記とした女性。死神、綺邑。

「わかっているよ。さて、あなた、名前はなんていうの？ちなみにオレは薪。これは穂琥。ちょっと用事があってここまで来させてもらった」

薪の唐突の質問に、むしろ此方のほうが聞きたいことがたくさんあると言いたげにその女性は言いよどんだ。

「幸奈（ゆきな）、です。このヒトは翔蒔（しょうじ）です」

幸奈と名乗った女性は震えた声でそういう。目の前の少年たちは一体ここに何をしに来たのだろうか、わかるわけも無く、また教えてくれる様子もなく。

薪は幸奈の名を聞いた後に綺邑に向き直る。

「で？綺邑よ。何故お前がここに？」

「これは私が扱う」

ぶっきら棒に冷たく言い放った綺邑だが薪は折れることなくそんな綺邑に尋ねる。だから、何故？と。綺邑は面倒くさそうな表情をしたが諦めたように語る。

「罪。しかし別に悪くは無かろう。救ってやろうとは思う」

綺邑の言葉に幸奈は震えた。言っていることはきっと理解し切れていないだろうけれど、何故、この翔蒔が死んでしまったのか経緯を考えると、最初に言った『罪』という言葉に引っかかりを覚えたのだろう。幸奈は綺邑の言葉に聞き入るようにして耳を傾けた。

「が」

綺邑は言葉に否定的な接続詞をつける。薪もその接続詞を気にして首を傾げる。綺邑が助けると判断したのであれば、難なく救うことが出来るはず。否定する要素など無いはずだが。

「この男自体に生きる意志が無い」

薪はその言葉に差し当たって疑問に思うことは無かったらしく黙する。しかし、穂琥と幸奈はその言葉に驚く。幸奈にいたっては薪や穂琥が何で、綺邑が何かを知らないから、余計に混乱しているのだろう。

「オレらは『眞匏祇』という種族だ。そしてその黒いのが『死神』といったところだろうかね」

幸奈はひたすら口をパクパクさせていた。現状を理解することが出来ていない。

「死神自体はなんとなく耳に覚えはあるだろう。ま、その覚えのもののイメージとは随分と異なったものだけどね。ともかくだ。オレも詳しいことまではよくわからないし、知るつもりもない。けど、この死神はあんたの旦那を生き返しても構わないと言っているんだよ」

薪の羅列する言葉に幸奈はさらに混乱する。しかし、生き返らせることが出来るということを知って幸奈ははっとした表情を見せた。

綺邑が誘うのは死者の魂。事と場合によってはその魂をもとある場所へ返すことが出来る。現に、薪もそれで命を救われているのだ

から。しかし、今戻そうとしている男、翔蒔の魂は元の器に戻ることを拒否した。過ちを犯したことによる罪悪感で元に戻るのもおこがましいと。

「オレも過去に過ちを犯した。そして死ぬはずだったところをこの死神に救われた。気持ちはわかる。でも、死ぬことが罪をかぶることではない。罪を償うことではない」

薪の声に諭されるように幸奈は瞳を揺らした。

「生きて、やらねばならぬこともある」

「あなたは・・・・一体、何？」

「此処には有らぬ存在、というかね」

薪はそっと言い募る。今までの薪とはどこか雰囲気が違う気がする。その言葉回しがどこかかっこよく思う穂琥だった。

「あなた達は・・・一体・・・。私にとって何ですか？幸ですか？不幸ですか？」

震える幸奈の声。それが求めるものは光か闇か。幸奈に期待に沿う事を言うつもりは無い。いや、いうことはできない。だから薪はありのままを伝える。

「オレ達がそれを決めることは出来ない。あんたが決めればいい。ただ、オレはあんたに幸福をもたらしたいとは思っているということは伝えておく」

信じる信じないは別の話。薪たちは幸奈に味方するつもりでいる。しかしその『想い』が幸奈にとって幸福になるかは分からない。感

じ方など様々だから。

薪の言葉に幸奈はふっと肩の力を抜いた。そして潤んだ瞳で小さく呼応する。

「貴方たちを信じます」

第七話　明らかになった存在

綺邑が嫌そうな目で薪を睨む。幸奈の返答を聞いて話しが一時、完結したためにその場から消えようとした綺邑を薪が呼び止めたのが原因だ。

「貴様、この期に及んでまだ何か？」

冷たく重いその言葉に慣れていない幸奈はぞっとする。無論、穂琥もしたけれど。それでもめげない薪の神経はどれほど図太いのだろう。

「まぁ、いいじゃないか！一つ！聞きたいんだ。それ答えてくれたら行っていいから！」

薪の回答に綺邑は冷たく睨む。しかし、この沈黙は綺邑の肯定の仕方だ。薪は軽く謝礼を述べてから質問をぶつける。

「お前って一人か？」

「は？貴様、何を言っている？」

「いやな、死神はこの世に一つしかないだろう？二つも在る事が出来るのかな、ってさ」

薪の質問に綺邑は怪訝そうに眉を寄せた。

「瞑、って言うんだけどさ。知っているか？」

「いや。知らんな」

瞑の質問であるなら穂琥も参戦したい。

あの違和感はまるで違う。眞匏祇のような雰囲気を漂わせているというのに眞稀が全く見えることが出来ないあのへんな『生物』を。

そんな疑問と不安を綺邑にぶつける。ぶつけられている綺邑はひたすら黙っていた。此処まで黙する綺邑も相当珍しい。肯定というわけではなく、思考しているのだ。そんな思考する時間に綺邑はあまり時間をかけない。その思考している時間すら惜しい。故に思考することを止めて知らんと答えるのがいつもだ。

「知らんな」

長い沈黙の後に綺邑は答えた。

「聞いた限りでは記憶に無い。会って観ないとわからんが、会うつもりは無い」

言い切った綺邑の言葉に穂琥は怒鳴るように言い返したが薪がそれを制止する。

「なら会わなくてもいい。オレの記憶を少し見てくれないか？」

綺邑は一度面倒くさそうな顔をしたが仕方ないといった風で薪の傍により薪の額に綺邑の額を当てる。そして目を閉じる。そうして薪が綺邑へ眞稀を流し込めば、その眞稀の流れに乗って過去の記憶映像が相手へ届く。

映像を見終わった綺邑は薪から離れてさらに黙した。見覚えがあるのかないのか。知っているのか否か。綺邑は答えない。

「あの・・・」

弱々しい声が沈黙の中に響いた。それで気づいたがすっかり幸奈が居ることを忘れていた。

「瞑、というのですか？私も・・・その方を知っています」

幸奈のその台詞に全員が驚く。

翔蒔が息を引き取ったのは昨日の事。その日に起きた出来事。

幸奈は今にも消え朽ちてしまいそうな翔蒔の面倒をしきりに見ていた。

「迷惑かけてすまないな・・・」

「いいえ、いいのよ。ずっと二人でって、決めたじゃない」

うつろな目の翔蒔に必死に言葉を掛ける幸奈。翔蒔はただ過去を悔いていた。悪いことをしたものは地獄に落ちるのが定めなのだと。

「そんな事言わないで・・・。貴方は悪くないわ。いつかきっと救われる。いつか・・・」

「あぁ・・・そうだといいなぁ」

翔蒔のその声には諦めが混ざっている。きっと自分は救われない。幸せになってはいけないのだと。自分はどんなに不幸でもいい。だから目の前のこの女性にだけは幸せでいてほしいと願うしか出来なかった。

「失礼」

玄関のほうで声がする。幸奈は客だといって立ち上がった。

突然現れた男は瞑と名乗り、翔蒔の病を治せるかもしれないといってきた。それに歓喜した幸奈は瞑を中に入れた。

しかしどうにも胡散臭い。瞑はふふ、と笑って翔蒔の額に手を置いた。やったことといったらそれだけだ。立ったそれだけの行為で瞑はこれで帰ると言う。

何が何だかわからないまま幸奈はその瞑を見送ってしまった。そして戻ってきた時、翔蒔は息を引き取っていた。

穂琥はその話しを聞いて震えた。普通の人間ならわからないかもしれないけれど、眞匏祇である穂琥にならわかる。額に手を当てたとき、確実に瞑は翔蒔の生気を吸い取った。ヒトの命を一体、何だと思っているのか！腹立たしくてたまらない！

「落ち着け、穂琥」

薪に言われてむっと黙る。そして薪はそのままひたすら黙っている綺邑へ目を送る。

「おそらく・・・奴の名は邑頴(ゆうえい)だろうな」

「知っているのか？」

綺邑はなんとも口惜しそうな顔をしていた。こんな風に表情を歪ませたところを始めてみた。

「死神だ。元な。今は違う。既にこの世には存在していないはずの

ものだ」

綺邑の語り方と雰囲気。そして元死神であるという綺邑の言った事実を踏まえて導き出るたった一つの答え。

「お前の・・・父親か？」

綺邑は小さく頷いた。肯定の仕方にそれを用いたことが無かったので薪も穂琥も少し面を食らった。まさか、一度朽ちたはずの死神が再びこの世に舞い戻るなどありえない。あっていいはずが無い。しかし、邑頴は綺邑の父。もとより凄まじい力を有していたことは事実。もしかしたらそうして今この世に存在することは造作も無いことだったのかもしれない。

「さて。記憶はオレが持つ約束だったな」

薪がパンと手を叩いて空気を割った。話に段落が着いたからだ。必要なことは全て聞いて今の薪にとって欲しい情報は大抵入った。よって此処に長居する必要は無い。

「此処であったこと、全てをオレがもらう。つまりはあんたの記憶を消すって事だよ、幸奈」

幸奈は息を呑む。せっかく知り合えた彼らのことをすっかり忘れてしまうのは悲しくてたまらない。切なくて仕方ない。

「すまないね、約束があるんだよ。綺邑に出てきてもらうとき『記憶はオレが持つ』といってしまったからね」

「私は見世物じゃない。たかが人間風情が私を記憶しておくなど痴がましいと知れ」

綺邑の発言に幸奈が震えた。その殺意にも似た感覚に幸奈は恐怖したのだ。そして、俯いて苦しそうに顔を歪めて、記憶を消し去ることを承諾した。消えてしまえば何も残らない。今ある不安も記憶さえなくなれば消えてしまうのだから。

「おい」

薪が記憶を消す作業に入ろうとしたとき綺邑が幸奈に声を掛けた。幸奈はきょとんとした表情をした。

「最後に聞きたい事がある。答え次第では其の侭にしても構わん」

「ほう？」

綺邑の言葉に反応したのは薪だった。そのことに綺邑はいささか不機嫌そうな顔をしたが気にせず話を進めた。

「まだ、話が残っている。瞑と名乗った男、何を手渡した？」

幸奈はその言葉で酷く驚いた顔をしていた。そしてそれの回答を幸奈は渋った。そのことに綺邑はふんと鼻を鳴らして面倒臭そうに薪を睨む。薪はそれを受けて肩を落としてから幸奈の肩に触れる。

「こういうことは言ってしまった方がいいよ。別に悪いようにはしないし。特にオレ達にはね。それに事と場合によっては記憶が飛ばずにすむのかもしれないし」

幸奈は悲痛な表情でしばらく考えてからわかったと承諾すると部屋の奥へ入っていった。それを見詰めて薪は少し警戒の色を強めた。

第八話　魂石と共鳴する意味

瞑は語る。誰にも言ってはならないと。そうして渡してきた小さな箱。ここに有らぬ者たちが来たときにそれを渡すようにと言った。そうして瞑は立ち去る。その立ち去る間際に振り向いてふいに笑って言った。

「礼だ、と伝えておいて欲しい」

幸奈はその箱を薪に手渡す。薪はそれを手にした直後、その中身を悟った。そっとあけるとやはり思ったとおりのものが入っている。しかし、形は想像とは全く異なるものだった。

「魂石、だな」
「そのようだな」

薪の言葉に綺邑が反応する。しかし、穂琥にしてみれば薪の持っている箱の中身が魂石であることがわからない。魂石とは本来、掌に乗るくらいの硝子玉のようなものだ。その美しさときたらそれに匹敵するものなど有りはしないほどに、命の輝きだ。

箱の中に入っていたものは色は完全にくすみ、不透明であったし形も球体ではなく歪な、星型のように凹凸のあるものではっきり言えば見るも無残な形であった。

「仲間の？」

穂琥がそっと尋ねる。しかし薪はそれを否定する。眞稀は今までに

会ったことのないものだと。そして魂石だと知ってからの綺邑の挙動の変化に薪は疑問を覚える。そして一体綺邑が何を考えているのかを出来うる限り考える。そうして見つけた一つの可能性。

「幸奈が眞匏祇だとでも言いたいのか？」

「可能性が無い訳では無いな。共鳴している」

「なんだよ、共鳴って。確定じゃねぇか」

綺邑の言葉に薪は鼻で笑うように返した。しかし綺邑はそれでも回答をはぐらかす様な言葉しか言わない。

「何だよ、それ。何なら試すか？」

「好きにしろ」

薪は幸奈に向き直る。そして幸奈が眞匏祇か否かを調べると言う。幸奈は混乱する。

「大人しく黙っていればそれで良いんだよ」

綺邑の言葉に幸奈は身を縮める。しかし、理解も出来ないこの状況でそんな事を言われる幸奈が可哀想過ぎて穂琥は綺邑に噛み付く。

「何それ！そんな言い方しなくてもいいじゃない！」

「煩い。少しは黙っていられないのか」

「んな！？」

綺邑の返しにイラッとする穂琥。今すぐにでも殴りにかかりたい衝動に駆られたが、そこはなんとか抑えた。

「それに眞匏祇な訳あるの！？」

「それに関してはお前が一番わかるだろう」

返答した薪の言葉に穂琥は返すことが出来ない。確かに事実だ。自分はこの年近くなるまで自分が眞匏祗であることを知らなかった。正確には覚えていなかった。故に幸奈も、同じ事。さらに幸奈の場合、体内に魂石を宿しては居ない。だからこそ、体外に眞稀がもれ出ることが無かった。薪でも気づくことが出来ないほどに。

綺邑に急かされて薪は調査にかかる。

幸奈の前に立った薪はその幸奈の足元に陣を描き始めた。その光景はきっと幸奈にとっては信じられないことかもしれないけれど、今更それに驚くことも無いと幸奈は意外に冷静にそれを見ていた。

薪が描く陣。ペンなどの書き記すものを一切持っていない薪の指から発光色の橙が生み出されている。眞稀より発せられたもので描いているので、それなりに眞稀を有している者でなければ陣を書き上げる前に眞稀が尽きて失神してしまう。

「さて。これで準備はオッケイ」

書き上げた薪は陣から出て陣の手前に諸手をつく。そしてその陣へ眞稀を流し込む。

陣は橙の色をより深めて輝いた。それを見て薪はにやりと笑って立ち上がった。その際に陣も消え去った。

「決まりだな」

薪は腰に手を当てて綺邑のほうへ目をやる。綺邑は不機嫌そうに鼻

を鳴らすだけだった。

「えと・・・？」

「あの・・・」

穂琥と幸奈の声が重なる。薪はそれを聞いてそちらに目をやる。一瞬、穂琥を軽く睨んでから幸奈のほうに目を移す。

「陣が無色に変化すればそれは眞稀を有していないということで人間。橙がより強まればオレとその陣の中央に立っているものの眞稀が共鳴したということでより一層橙に輝く、つまり眞匏祇だということ。つまり、あんたもオレらと同じ、眞匏祇ということ」

幸奈は呼吸を少し荒げて不安そうな顔をしている。それも当然だろう。

薪に睨まれて萎縮したが、知らないものは知らないのだから仕方がないだろうと内心で文句を言った穂琥だったが、それを悟った薪がまた睨んできたので今度は本当に萎縮することにした。眞匏祇の事を知らなさ過ぎると自覚する穂琥だった。

「帰る」

綺邑が無造作にそう言って姿を消した。幸奈はそれに一瞬びくっとしたけれど、薪が姿を現すことが出来るのだから消す事だってできるさと、乾いた笑いを立てたので幸奈はひとまず納得することにした。

「さて、幸奈さんさ」

「・・・は、はい・・・？」

薪は幸奈に向き直る。

第九話　自覚の無い眞匏祇との出会い

先程であった二人の子ども。摩訶不思議でいまだに信じられないその存在にどこか頼ろうと思ってしまうのは何の心理か。兎に角。そんな二人についていけばきっと何か道が開けるかもしれないと思ってここまでついてきたが、一体この二人の口論はいつまで続くのだろう。幸奈はただ、そこにたって二人を見ているだけだった。

「だぁかぁらぁ！」
「仕方ないだろう！仮にも女だろう！」
「仮って何よ！仮って！立派な女です！」
「仮だろう！お前の何処が女だ！」
「立派な女性じゃない！！」

最初の論議から大分外れた話になっている。感情論で言い争いをしているのが原因だろうと、幸奈はそれを見ている。

そもそもこんな口論になったのも今から３０分前の事。口論の優勢に立っている男の子とそれに必死に喰らいつく女の子。男の子が薪、女の子が穂琥。そして幸奈の三人は寝床について話を始めたはずだったが気づいたら口論になっていた。穂琥と幸奈はホテルを借りてそこに行けと薪が言う。しかし、穂琥の言い分は薪の家に行くという。

「寝るところだってねぇだろう！」
「あるもん！二個！」
「二個じゃ足りないだろう！？」
「足りるもん！私達は布団！薪は屋根！」
「オレは外か！」

この二人は口論をしているのか漫才をしているのかわからなくなってきた幸奈だった。そしてそんな二人を見て少しおかしくなってしまった。

「ぷふ・・・」

うっかり声に出てしまってそれが理由で二人の口論という名の漫才はを終焉を迎えた。

「あ・・・ゴホン・・・。済ません。コイツと一緒にホテルに泊まってください。ホテル代などは気になさらないで結構ですので」

薪はそう言って穂琥を差し出す。そんな彼の態度に幸奈は疑問を覚えていた。幸奈が年上ならば敬語を使うことになんら疑問を感じることは無いのだが、この少年は先ほどまではそう言った態度は一切無く、突然こんな態度を示した。そんな不思議な少年に混乱を抱いたままだ。

「では、オレは情報を集めに行きますので、失礼します」

薪はそう言って姿を消す。幸奈は呆然と彼の背中を目で追ってから足元で不貞腐れている少女に手を差し伸べる。

「あ、どうも。ありがとうございます、幸奈さん！」

かわいらしい笑顔で幸奈の手を取る。この少女は会ったときから態度が変わっていない。なら、特別なのはあの少年か。

「仲、いいですね」

「え？そう見えます？あんなので？」
「えぇ。とても。素敵なご兄妹だと思うわ」
穂琥は一瞬、驚いた。薪と穂琥の関係で兄妹だと言ってきたのは幸奈が初めてだ。そのことを幸奈に伝えるとやわらかい笑みを見せた。
「大人が見れば恋人には見えないわ。とても仲良しには見えるけどね。貴女がとても彼の事を慕っているということも」
「え・・・そ、そんな事までわかっちゃうんですかぁ～？照れちゃうなぁ・・・」
穂琥は頭をかく。大切な兄。大好きな兄。だからずっと一緒に居られる。不安なんて何も無くて。

穂琥と幸奈は薪に言われたとおりホテルに入る。部屋に入ってゆっくりとくつろぐ。そうしてゆったりとしていまだに信じられない中に身を投じているのだと考えると実感がわかない幸奈だった。そもそも、一緒に来るようにと薪に言われたからここにいるが、一体何故一緒に行くべきだったのか、説明を受けていない幸奈は少し不安ではあったけれど、この穂琥という少女然り、何故か幸奈も薪という少年を信じてしまう、信じさせる力を持っているように思えた。とにかく。今は何もわからない。きっと彼はそれを説明してくれるはず。それを信じて幸奈は休むことに決めるのだった。

翌朝、いつ帰ってきたかわからない薪に起こされて不機嫌に答える穂琥。
「なぁにぃ？」
「幸奈さんは？」
「奥」
「そうか」

穂琥の指差した扉を見て薪は肩を落とした。

支度が出来たらしい幸奈が部屋から出てきた。そしてそんな幸奈に薪は少し考えてから尋ねる。

「ねぇ、幸奈さんさぁ。ま、あの時は記憶を消すつもりだったし、そのまんまでいったけど。敬語ってオレ、嫌いなんですねぇ～。でもやっぱ人間だし、目上には敬語かな？って思ったけど。やっぱり嫌いなもんは嫌いだ。だから、いいですかね？普通に」

本当に年上というものをかなぐり捨てたその発言に幸奈もだが穂琥も驚く。ここまでぶっちゃけて言い切ることの出来る薪が凄いとすら思う。

「構いませんよ・・・」

幸奈としてはきっと理解できたこと。薪の態度の変調に。

「それで、幸奈さんさ」
「幸奈、で結構です」
「そう。じゃぁ幸奈さ」

幸奈に言われたとはいえ、簡単に敬称を剥奪させたよ、コイツ・・・と思う穂琥だった。

「はっきり言ってあんたは危険な状態にあるんだよ」

瞑、邑頴が一体何を思って幸奈に魂石を与えたのかわからない。主と称してそれに付き従っているあのもの達がそのことで動き出さな

ければいいのだが。ともかく色々と危険が生じるということ。

「だから日常生活ではオレが絶対に護る。それは約束する」

強く放たれたその言葉にどれだけの深い意味が篭められているのかは、会ったばかりの幸奈にはきっとわからないだろう。それでもいいのだ。ただ、今のこの薪の言葉さえ、信じてくれるのなら。

幸奈にはとりあえず宝探し、という題目でここへきたということにした。まぁ、あながち間違いではない。痲臨は眞匏祇たちにとって宝玉に等しいのだから。

そうして薪と穂琥は移動をすると幸奈に伝う。幸奈は不安そうな顔をしながらも連れて行って欲しいと願い出る。薪はそれをまるで言ってくると予想していたかのように即断で許可を出す。薪が術を行使する。妙な浮遊感に襲われるのだった。

第十話　出会いと別れとその向こうにあるもの

気がついたらそこは地面。全く見知らぬ土地へ一瞬で移動してきた。眞匏祇とは本当に摩訶不思議なものだと幸奈は実感する。

薪は警戒心を強めた表情をする。それが一体何を示すのか。簡単なことだ。奴らがこの場に現れる。それだけの事。

「あらぁ？もうきたの～？」

誓茄が声を発する。

「そちらから呼んでおいてそちらが遅れるとはいい度胸だな」

薪の言葉に誓茄はもだえる。これじゃ話にならないと薪は肩を落とす。すると後から圭と、新顔の男が現れた。

「始めてみるな」

「名乗るほどのものでは」

「伏せるか？」

「滅相も無い。必要が無いということです」

「名を与える価値が無いと？」

「考えすぎであります」

礼儀正しく見えるその男に薪は不吉な予感を感じた。

彼らは主からの伝達があるといってきた。薪は仕方なくそれを大人しく聞く。その伝達はこうだった。

―貴方を我が元まで案内申し立てる。気が向いたのなら足を運んで頂きたい。宜しく申し上げます、スウェラ様

薪はそれを聞いて険しい表情になった。誓茄は嬉しそうに『スウェラ』という名前なのかと尋ねてきたので薪はそれを否定した。すると少し残念そうな顔をしていた。

「以上で御座います。よろしければ我が主の下まで」

男はそう言って姿を消した。それに習って誓茄と圭も姿を消した。

一体何がしたいのか理解できないけれど、穂琥としては何故幸奈に突っ込んでこなかったのかが疑問に思えた。それを薪に尋ねようと思ったが穂琥はその寸前で思いとどまった。薪の様子が明らかにおかしい。

「どうしたの？」

「奴は知っている・・・」

薪の言葉に首を傾げる穂琥。

スウェラ、というのは昔、まだ巧伎が存命だった頃、巧伎がとある集落を訪れたときに仮名として使った名前だ。わざわざ偽名まで使ってその集落に入った目的など、最早言うまでもない。あえて言うなら、巧伎がその集落を出た時その集落は壊滅していた、とだけ言っておこう。

ともかく。そうしてスウェラという名前を知っているということは、あの集落の生き残りで此方が怒夸、乃至はそれの息子だということが既にわかっているということになる。その上で、我が元まで

来いと言ったと言う事は、あの、『主』という眞匏祇は此方を叩き潰す算段が出来たということになるだろう。長きに渡った復習の炎を叩きつけるために。

そうして考えている間に奇妙な気配を感じて薪は剣を構える。

現れたのは瞑。ただひたすら此方を睨む。その目はおそらく幸奈を見ている。

「何しに来た？」

薪の質問に瞑は答えない。本当に無口で何を考えているのかさっぱりわからない。その後に圭がついてきた。瞑の目は一度圭を遅いといわんばかりに鋭く睨むと圭は軽く萎縮した。

「ゴメン・・・。そこの女は始末しろって」

圭がそういう。幸奈はひっと小さな声を漏らす。

「護りながら戦えるか、スウェラよ」

瞑のその言葉を聞いて薪は一瞬ぞっとした。前にも似たような感覚を得たことがある。死の淵に立ったあの感覚。確実に瞑は死の気配を纏っている。直感的にそう思った薪だった。そしてその危険性から薪は一瞬で替装する。

「始末など、させるか！！」

いきなり薪が巨大な刀を取り出して振り回したので穂琥は驚いたが、よく見たら振ったその先に瞑がいた。一瞬で瞑は薪の前まで来てい

た。それに反応したから薪は刀を振るったのだろう。その勢いで瞑が吹っ飛んだ。

「大した餓鬼だ」

言葉を発する。それだけでどこかダメージを受けてしまいそうな程だった。これが歴代の中で特有といわれ最強と謳われていた死神の重みなのだろうか。これがあの綺邑の親なのかと考えると正直ぞっとする。

圭が幸奈めがけて刀を振るう。それに穂琥は気づき、何とかして圭の刀を弾き返す。薪と瞑が視界の隅で戦っている。ならば、穂琥だって幸奈を護る何かをしたい。あまりなれない刀を手に持ち圭に向う。

「お前、慣れていないな。実戦したことあるのか？」

「い、一度だけ・・・」

「ふぅん」

圭は興味もなさそうに声を出して再び襲い掛かる。

あちこちで激しい攻防が続く。一体何を考えているのだろうか。わからない。つい昨日、出会っただけの自分のために命を張って戦う少年と少女の行動の意味がわからない。どうして？

「どうして私なんかのために・・・」

震えた手を握って幸奈は小さな声を漏らす。こんな風に自分のために誰かが傷つくのは見たくない。見ていられない。でもどうしたらいいのかさっぱりわからない。

声。懐かしい声が聞こえる。

―生き抜けばいい・・・

はっとした。ずっと傍に居た大切な人の声。一体どうしてその声が聞こえたのかわからないけれど、幸奈はその声に耳を傾けた。かすれて消えてしまいそうな声だから周囲の音で簡単に聞き逃してしまいそうだった。

―生きて生きて・・・幸せになればいい

愛しい人。この世で最も愛した人。

「翔蒔・・・？」

聞こえた声の主。紛れもなく翔蒔のものだ。幸奈は震える。

―いつかきっと救われる、そう言ったのはキミだよ・・・？大丈夫。俺はずっと一緒に居るから・・・

幸奈は地面に膝を着いて涙した。暖かい声。それが何故するのかなんて幸奈にはわからない。それでも、その声の暖かさに嬉しくて涙が止まらない。そして今、必死で戦ってくれている彼らのためにも、しっかりと意思を持たなければいけないのだと感じる。もう聞こえなくなった翔蒔の声を耳に残しながら幸奈はそっと立ち上がった。

薪は先程から違和感があって仕方なかった。滅多に喋らないと聞いているが、目の前のこの男、瞑は先程からずっと口元がにやけている。まるで何かを楽しんでいるかのように。嘲笑っているかのよ

うに。

「何がおかしい？」

薪の問いにやはり瞑は答えない。しかし、瞑は薪の質問とは全く関係のないことを口にした。その口元は酷く歪んだ笑みだった。

「礼、とだけ言っておこうかね」

「は・・・？何を・・・」

瞑の攻撃を受けつつ攻撃しながらの会話のため、まともな会話はしていない。一方的な投げかけになっているその言葉のやり取りの中で薪はその瞑の言葉の意味を理解できなかった。そうして、この時の言葉の意味を知るのは今からずっと先の事。

膨大な眞稀が膨れ上がって破裂したのはそれから間もなくだった。それはあまりに突然で流石に薪もその眞稀の破裂に対応できなかった。軽くその場から飛ばされて数メートル先に着地した。しかし、瞑や圭を見るともっと吹っ飛んでいるところからこの眞稀の原点が何であるか悟った。

「幸奈・・・！？」

薪は眞稀の風圧を抑えながら急いで幸奈の元に駆け寄る。幸奈の近くには穂琥が居るはずだ。近くで眞稀の圧力を感じてしまってはいくら敵意がなくても危ないかもしれない。それに幸奈はコントロールが出来るとはとても思えない。

風圧の中心には震える幸奈が居た。その傍に穂琥が居る。まるで台風の目のように中心部だけ何もない、静寂とした空間だった。そ

こに穂琥は呆然と立っていた。

「し、薪・・・！幸奈さんが・・！！」

「あぁ、正直驚いた。幸奈！もう大丈夫だから！落ち着いて・・・」

「し、しん・・・くん・・・」

幸奈は震えた声で呼応する。

「もう、平気だから。落ち着いて。ゆっくりと・・・そう、力を緩めて」

薪の呼吸に合わせて幸奈はゆっくりと眞稀を下げいく。今まで一度たりとも眞稀を使用した事がない者がいきなりこんなに大きな眞稀を爆発させてしまっては死に至る事だってありうる。薪は自分の眞稀と同調させながらゆっくりと幸奈の眞稀を下げていく。

やっとの事で収まった眞稀は先ほどの大きさなどまるで無かった様に静寂と化し消え去った。そして当の幸奈は気を失ってしまっていた。

「やってくれるね！」

圭が叫び声を上げる。薪が鋭くそちらを睨む。後ろでゆっくりと立ち上がった瞑を見て薪は眉を寄せる。全くだ。戦っているときからわかっていた。あの瞑は全く本気で戦っていない。それで居て薪と拮抗して剣を交えた。元が死神であるのならそれは理解できるが、何が理解できないかって、『主』と呼ばれるものに付き従っているということ。

「いつまで時間をかけているんだ？」

突然空気を割るようにして声を張ったのは鼓斗だった。圭が口惜しそうに状況を説明して少し不機嫌そうに顔をしかめた。

「瞑。お前が居ながら何でこんな事態になった？」

「・・・・・・」

「応える気など無いか」

呆れたように鼓斗は瞑から薪へと目を移す。それから強烈な眞稀が迸る。穂琥はそれに軽く気圧されたが薪は微動だにしなかった。あの程度の眞稀では気圧されるわけがないのだ。なんたってあの巧伎の眞稀を幼少期に何度も受け続けているのだから。それよりも慣れない死神の力のほうが今の薪にとっては堪える。

「ひとまず、そこの女を始末させてもらう」

鼓斗は素早く刀を用意すると薪に飛び掛る。

「へぇ。幸奈をやるって言っているのにオレに突っ込んでくるのか？」

鼓斗の刀を簡単に受け流しながら薪が飄々と言う。鼓斗は面倒くさそうな表情を浮かべながらもふんと鼻を鳴らして言う。

「よく言うな。結局、お前を鎮圧しなければあの女に手など届かないだろう」

「へぇ。わかっているねぇ」

薪のその余裕の態度が気に入らないのか、鼓斗はさらに刀を振り回す。しかし、それを意図も簡単に受け流すので鼓斗はさらに手に力

を篭めていた。

ドン。鼓斗が勢いよく前のめりに倒れたのは薪が切りかかろうとしたところだった。薪は驚いて刀を止めた。鼓斗が素早く起き上がって怒号を上げた。

「瞑！何をしやがる！！事と場合によってはお前でもただでは済まんぞ！」

「黙れ、餓鬼風情が」

放ったその言葉に鼓斗だけでなく薪も竦む。

「そんな荒れた力で『スウェラ』が斬れるか」

低く重たいその声は耳を解して心臓を貫く。無駄に意気が上がってしまうほどの重圧に薪は歯噛みする。

「さて。二対一か。キツイなぁ・・・・」

「居るだろう？そこに、眞匏祇が」

薪の言葉に鼓斗が笑いながら言う。穂琥を指差して。

「残念だがあいつは戦闘要員じゃないんでね。相当なことが無い限り先頭にはださねぇよ」

薪の言葉に鼓斗はにやりと笑う。それから躊躇無く穂琥へ斬りかかる。薪は穂琥と鼓斗の合間に入って刀を受け止める。その直後、薪の右脇腹に激痛が走った。鼓斗を勢いで投げ飛ばしその激痛の原因を弾き飛ばす。

目の前で一体何が起きたのか、一瞬過ぎてわからない。鼓斗が来たかと思ったら薪が来て、薪が来たかと思ったら瞑が来て。それから目の前には誰も居なくなった。

「薪！？平気！？」

「大丈夫だ、とりあえずここは引くぞ！」

「あ、う、うん！」

「させるわけ無いだろう！？」

鼓斗が鋭く刀を振り上げる。薪はそれを上手いこと避けて穂琥のほうへ走る。穂琥と自分との間に瞑が滑り込む。あまりに突然の乱入に勢いが止まらず瞑の懐に突っ込んでしまった。

本当に短い時間だったはずが酷く長い時間に感じられた。そっと頭の後ろに手が回されて瞑が薪の耳元に口を近づけて小さく囁く。その言葉を聞いて薪は仰天する。そうして瞑は薪を地面に叩きつける。

その時間は現実にしてみればきっと一秒も無かったかもしれない。それでも薪にとっては何十秒にも、何分にも感じていた。そして瞑の言ったその言葉の意味を理解できずに地面に叩きつけられても混乱が解けず、直ぐに動くことを忘れた。

「幸奈さん！！」

穂琥の叫び声で薪ははっとして飛び上がって幸奈の倒れていたほうを見る。そこで目に映ったものに薪は全身の力が抜けた。

幸奈の身体を見事に貫通する瞑の刀。幸奈は全く以って微動だにしない。瞑はそのまま幸奈を投げるように地面に叩きつけると踵を

返して数歩歩いて姿を消した。幸奈を仕留めたことで圭も鼓斗も満足したらしく、同じ様に姿を消した。

すぐさま傍に駆け寄った穂琥は幸奈を抱きしめて何度も名前を呼んだ。何度も。それでも幸奈はぐったりとして動く気配を見せない。

「幸奈さん！幸奈さん！！お願いです！目を開けてください！！幸奈さんってば！」

叫ぶ穂琥の手から薪は幸奈を奪い取る。そして様子を確認していた。穂琥はただ、幸奈が真っ青な顔をしてぐったりしているのでそれが怖くて涙が止まらなかった。確実に匂う死の気配。それだけで穂琥は目の前が真っ暗になってしまっていた。それに反して薪は意外に冷静に幸奈の状態を見ている。

「何しているのよ！！何とか早く治療しないと！死んじゃうよ！薪！」

「・・・いや、するだけ無駄だ」

「何言っているの！？諦めないでよ！？まだ息はあるんでしょう？！」

「・・・」

穂琥の言葉に薪は答えない。ただ、刺された部分に手を当てているだけ。眞稀も何も練らずに。

「薪！あんたがそんな簡単に命を諦めるような奴だって思わなかったよ！私がやるから！」

「いや、いいんだ。本当に」

「何が！」

「幸奈は死なない」

「だからっ・・・え？」

薪の言葉に穂琥は思考が急停止した。横たえてある幸奈の腹部、つまり瞑に刺されたところに左手を添えてただ黙ってみている。穂琥はそんな薪に不安な目を送った。そうして薪の状態を少し確認してはたと気づく。左手で幸奈の腹部を抑えているのはわかる。では、右手は？膝を立てているために右手がどうなっているのか見えない。それでも穂琥は何故かそれに嫌な予感しなくて薪に尋ねる。

「薪・・・？右手、どうしたの？」
「え？別に。怪我はしていないぞ」
「そう・・・なの？」

薪の言葉にきっと偽りは無い。それでも穂琥の不安は消えない。何か嫌な予感がする。それがどんどん膨らんでいくのはきっと直感と呼べるものなのだろう。

「薪、右手・・・見せて」
「何だよ。別に怪我なんてしていないって言っているじゃないか」
「見せて」

穂琥は無理やり薪の腕を引っ張った。思いの他、薪の腕は簡単に前に出てきた。そして出てきた薪の手を見て驚いて思わずその手を離してしまった。

「ま、真っ赤ジャン・・・？！掌が・・・血まみれだよ？！」
「別に怪我じゃないって・・・」

掌を見せて薪が言う。確かにその掌に怪我の類は見えない。しかし、穂琥は一瞬でそれが何であるか理解した。

「薪！わき腹！！」

幸奈を跨いで薪の右に腰を下ろす。明らかに薪は嫌そうな顔をしていたが抵抗することは無かった。

「あぁっ・・・！？何これ？！」

薪の右脇腹は酷いまでに抉られていた。先ほど。穂琥の目のまで一瞬にて行われた刀の交差の中で瞑によって引き裂かれた部分だった。

「酷いよ、これ！？何とかして治さないと！」

「いや、今はいい。それより幸奈を運ぼう」

「え？！そんな事言っている場合じゃ・・・」

「それこそ、そんな事言っている場合じゃない。オレはまだ平気だが、このままだと確実に幸奈は死ぬ。いいのか、それでも」

薪の脅すような強い目に穂琥は無言で首を振った。それしか出来なかった。よしと言って薪は幸奈をおぶって立ち上がった。

第十一話　認められた者

幸奈を抱えたまま薪は家の中に入る。そんな薪を見て穂琥は不安を隠せずにいた。あの薪が、酷い汗を掻いている。それはでも、当然のことだ。わき腹が酷く抉られ、その状況で自分と大差ない女性を抱えてここまで運んできたのだから。途中、穂琥が代わると言ったが、編に刺激を与えてしまえば死んでしまうからと交代を許さなかった。

幸奈を下ろしてから薪はため息をついて穂琥に向う。

「さて。ここにくればひとまず貞稀が保護をしてくれるから直ぐに死ぬようなことは無い。そこで、穂琥。悪いけど脇腹の治療を頼めるかな」

「あ、当たり前じゃない！」

穂琥は急いで袖をまくって薪の服を捲り上げる。その現状に絶句する。今までに見たことのない刀傷。まるで何かに食いちぎられたような酷い荒れ方。それだけじゃない。酷いところでは軽い壊死が始まっている。本来だったら死んでいてもおかしくない。

「大丈夫か？」

傷の状態を見て絶句した穂琥に心配そうに声を掛けた薪に穂琥は逆に怒号を上げる。

「それはこっちの台詞！何考えているの！？こんなので・・・！！普通、死ぬって！？」

「ま。オレ普通じゃないし。向こうもね」

「え？」

薪の言った言葉が理解できなったけれど、それがどういうことか聞いている暇があったらさっさと治療をするべきだ。

穂琥はすっと深呼吸する。まず、薪の状態の確認。

血は薪自身が自分の眞稀で止めているから支障は無い。しかし、そのぶん体力を消耗していくことになるので早く何とかしなくてはいけない。そんな眞稀で無理に止血をしていることもあり、眞稀の流れの状態もあまりよくない。こういった怪我に効く治療は確か、城の書庫で見た記憶がある。それが今、有効かはわからない。未だかつて例を見ないものだから。それでもそれを試さなければ薪の腹部はどんどん壊死していてしまう。眞匏祇にとって壊死とはイコール、消失ではない。上手いこと治癒することが出来れば再生だって容易なことだ。

「薪・・・。その、結構辛いかもしれないけど・・・その・・」

「いいよ。全てお前に任せる。穂琥が最善だと思うことをすればいい」

言い淀んだ穂琥に薪はそっと言う。その言葉の優しさが嬉しくて。そして何より、任せるといった薪からの信頼がたまらなく嬉しかった。それに何より、心配などする必要すらなかった。だって・・・。

―相手は薪だもの

穂琥は意識を集中させてから眞稀を手に篭める。そしてそっとそれを薪の患部に当てる。本来ならばここで耐え難い激痛が走り、呻き声の一つでも上げるものだが部屋の中はいたって静かだった。

今回、穂琥が行った治療には傷の具合によって変わるが、比較的時間のかかるものだった。まして、今の薪のように重症の傷に当たっては普通よりも時間がかかった。故に数分間の治療となる。本来ならば、数十秒で終わるものだが。

「は、はい・・・お、終わった・・・」

過度な集中と大きな眞稀を一気に消費するということで穂琥はどっと疲れて後ろに倒れた。

「大丈夫か？それにしてもまあ、任せるとは言ったが的確な治療だったなぁ。やっぱ見る目はあるな」

「えへへ・・・。一応ね・・・少しは勉強したんだよ」

―薪の役に少しでも立てるなら・・・

穂琥はへらへらと照れ笑いしながら起き上がった。

「平気？辛くなかった？」

「何で？」

「だって・・・この術、相当辛いって・・・。でも薪は呻き声一つ上げないでむしろ涼しい顔していたから」

「あぁ、本来だったら苦渋の表情をしたかったけど頑張っている穂琥の意識の妨げになるからな、抑えた」

薪はそれを簡単そうに言って退けるので穂琥は驚く。そしてやっぱりこういうところでも薪には適わないと実感する。

「でも、次からはいいよ。痛いときは痛いって言って」

「おう、わかった」

さてと、そう言って薪は立ち上がって幸奈の元に腰を下ろす。

「ゆ、幸奈さん・・・平気なの・・・？こんな重症をそのまま長いこと放置するなんて・・・」

「支障は無いさ。これは時間の問題じゃないから」

「え？」

「まま、気にするな。とにかく幸奈は平気だ。そんなわけでお前はとりあえずその返り血やら泥やらシャワーで落として来い。その間にオレが何とかしておくから」

「え・・・あ・・・はい・・・」

薪に言われるままシャワーに入る。一体、幸奈はどうなってしまうのか、穂琥にはさっぱりわからない。それでも薪が大丈夫だといったのだからきっと大丈夫なのだろう。

しつこい土埃や泥に悪戦苦闘してやっと落としきり、風呂場から出て着替えを済ませる。髪を乾かしている間にふと気配を感じて振り向いて驚いた。

「き、綺邑さん！？」

「聞きたい事が有る」

短く端的に綺邑は言い放つ。何かと穂琥が聞くと綺邑は瞑について尋ねてきた。何故、瞑を眞匏祗ではないと判断したのか。

「まだ、完全なわけじゃないけど・・・桃眼で視た時眞稀が全く無かったから・・・」

それを言ってからふと思った。薪の眞稀もきっと視る事ができないと。

「ほう。それだけか？」

綺邑の続いての質問。穂琥はそれに少し戸惑った。応えるべきか否か。

「それだけなら良い」

綺邑はそう言って立ち去ろうとした。穂琥は違うと否定の言葉を述べて綺邑の足を止めた。

「もう一つ・・・雰囲気が・・・似ていたの・・・貴女に・・・」

穂琥の言った言葉は脱衣所の部屋に木霊した。綺邑は冷たく見下ろしてくる。その目が薪より冷たいったらありゃしない。

綺邑はその鋭い目をふっと伏せてからそうかとだけ言って姿を消した。穂琥は呆然としながらその様子を見ていた。それから思い立ったように髪を乾かし始めた。

部屋のほうで何かの破壊音が聞こえたのは髪が乾いた頃だった。まだ全快していない薪に敵襲なんて来たら溜まったものではない。穂琥は慌てて脱衣所を飛び出してその足を止めた。

「ごめんって！悪かったって！本当に！！うわっ！？」

薪の叫び声が聞こえる。穂琥はただ固まっていた。

見れば。敵でもなんでもない。でも味方とも言いにくい。それが薪にありとあらゆる足技を繰り出している。

「うわっほうい?!ちょっ?!マジ止めて?!ごめんって!何度も謝っているじゃん?!うわあぁ!!」

薪が押されているその映像を見て穂琥は長い目でその様子を見ていた。綺邑が回し蹴りやら踵落しやらひねり蹴りやらとにかく攻撃しまくっている。それを避ける薪の表情は最早必死。見ていて哀れと思うほどに。その薪の見事な圧され具合を見て綺邑が強いということを改めて実感したような穂琥だった。

呑気に見ていたのはそれまでで家のあちこちが破壊されていくのを見て、さらに薪の必死さ具合を見て気づく。いや、敵じゃないにしても感知していない薪にあれほどの動きをさせては傷口が開いてまた大変なことになってしまう。

「止めて!」

綺邑と薪の間に入って諸手を広げる。寸でのところで綺邑の蹴りは止まる。あと数ミリ遅かったら穂琥に当たっていただろう。そしてその圧力を感じて穂琥は一瞬だけめまいを覚えたほどだった。

「薪は今、完全じゃないの!!」

そう言って綺邑を睨んだ、睨んだ穂琥の目は一瞬にして迷いに変わる。綺邑のあまりに鋭い目が穂琥の心を折りにかかる。しかし穂琥はここでは折れていけないと必死になって綺邑に抗議する。

「ふん」

興味がうせたように綺邑は踵を返したので穂琥はほっとして座り込んだ。

「悪いな、穂琥。でもまぁ、大丈夫だよ。避けなきゃそりゃ当たるけど、綺邑だって本気じゃないんだし。それに傷の方だってそこまで無理にはさせてないよ」

笑いながら言う薪に軽くイラつき覚えながらも仕方なくため息をつく。

「じゃぁ、幸奈を頼んだよ」

「・・・」

綺邑の返事は無い。いつの間にか綺邑は幸奈を抱えていた。抱える、といっても別に担ぐとか抱きかかえるとかそう言ったわけではなく、宙に幸奈がひとりでに浮いているように見えるだけだが。そうして綺邑はすっと姿を消してしまうのだった。

幸奈が大丈夫なのか尋ねると薪は小さく笑いながら何とかなると応えたので今度は薪の傷のほうを確かめることにした。

「大丈夫だって。そもそも綺邑をあんなふうに怒らせたのはオレ自身だしな」

薪はどこか可笑しそうに笑って立ち上がった。

「いやね。あいつにしては随分と珍しい事をしたからそれについて言い過ぎたら怒られた」

まるで子どもみたいに薪がいうので穂琥はどこか拍子抜けした。

「っていうか、薪がそんな風に突っ込むくらい綺邑さんが珍しいことしたの？」

穂琥の質問に薪は少し悩んだ表情を浮かべた。なんだ、それは。私には言いたくないことか、と穂琥は内心で腹が立っていた。

「ま、いいだろう！言ったら言ったで言ってしまったんだからいいだろう！」

薪は何か納得したように頷いてから穂琥の様子を窺った。

「え？私の怪我・・・？そういえば圭と戦ったときに随分と怪我したのに・・・今治っているや・・・」

「治してくれたんだよね、綺邑が」

薪はどこか楽しそうに言った。綺邑が自分の怪我を治してくれたことに驚きを感じていた。いや、それよりも死者を誘うことを生業としている死神が人を、眞匏祗を癒すことが出来るのだろうか？

「ま、アイツも『特殊』だからな」

薪自身もそう言った事までは流石にわからないようだった。

「まぁ、そんなわけだ。じゃ、少し休養を取ったらやりますか」

「何を？」

「桃眼の完全な扱い方、といっておこうかな。オレだってそれに関しては詳しいわけじゃないけど、やらないよりはましだろう」

「わかった」

薪は穂琥の全快しだい、直ぐにやるといってきたので穂琥は首をかしげた。傷なら綺邑が治してくれた。だったら平気ではないかと。しかし薪はそれを否定した。綺邑が治したのは表面的な傷だけ。まだ、内側、つまり眞稀のほうの回復は出来ていない。眞匏祗は体内、体外全て眞稀にて修復する。そしてその眞稀が枯渇したときは傷の直りが遅くなる。さらには疲労度も溜まる一方だ。そこで綺邑が傷を治してくれたおかげで傷のほうに眞稀を回さなくてすむので眞稀の回復だけを待てば通常の状態に戻ることが出来るということ。

では薪は？薪は綺邑に治してもらったのだろうか。

「いや、オレは治してもらってないよ。オレは嫌われているからな～。穂琥は綺邑に気に入られてんだよ。だからそれについて突っ込んだらさっきみたいに蹴り殺されそうになったんだけど」

薪の言葉に意外性を感じながらも穂琥は納得せざるを得なかった。

薪は軽く手を上げて部屋で休むといって穂琥に背を向けた。あちこちが破損した家を治しながら薪は二階へと上がっていった。

第十二話　開眼を目覚めさせて

薪の笑う声が聞こえる。

「何言ってんだよ。穂琥は穂琥だろう？もう強いんだし、自分で何とかできるだろう？オレは忙しいし、もう自分の命は自分で護ればいいさ」

目の前の薪はそうやって笑う。にこやかにとっても晴れた笑顔で。それとは反対に穂琥は悲痛の表情を浮かべる。どんどん歩き去っていく薪に手を伸ばして。

―待って。お願いだから待って。見捨てないで、薪。お願い、薪・・・薪。

「薪！！」

「！？」

大声を出して飛び起きた穂琥はしばらく呆然としていた。目の前に酷く驚いた薪の顔があった。穂琥は思わず薪に抱きついた。

「は！？ちょっと！？穂琥？！」

驚いた薪は何とかして穂琥を引き剥がす。

「もう朝だし、魘されていたみたいだから起こしてみようとしたんだけど起きる気配なかったから諦めようとしたら飛び起きてきたら驚いたよ」

「あ、ゴメン・・・。夢だ・・・」
「オレの名前を絶叫に近い形で呼ぶ夢ってどんなだよ・・・」
いつものように呆れたような口調で言ったがどうやら今回はそんな呑気な話ではないらしく、穂琥が尋常ではないほど落ち込んだので薪は少し焦った。
「薪は・・・さ」
穂琥が低いトーンで言う。
「私のこと・・・・見捨てる？」
突拍子も無い穂琥の質問。いつもの薪だったら「は？」と応えたかもしれないけれど今の穂琥を相手にそんな反応、するわけも無かった。穂琥の傍まで歩み寄って穂琥の前に膝を落として穂琥と目線の高さを同じにした。
「あるわけないだろう、そんな事」
「お前を見捨てるなんてオレの命を捨てるより有り得ない。何があってもお前を見捨てるようなことはしない。大丈夫、安心しろ」
優しくそっと、頭を撫でながら薪が言ってくれた。それが嬉しくて穂琥はそっと頷いた。
薪はそんな穂琥を確認して立ち上がると俯いている穂琥には見えない、見せないようにして微笑む。穂琥を大切に思う家族として優しく暖かな笑みを浮かべるのだった。

「落ち着いたら降りて来い。朝飯食って落ち着いたら特訓だから」
「うん・・・。・・・・・特訓んんん!?」

「当たり前だろ」
朝餉の支度をしながら薪が言う。穂琥は必死でそれに食いつく。完全ではない以上、しなくてはいけないということはわかるけれど、桃眼というものは療蔚の技だ。これからの戦いに必要性は存在しない、と穂琥は思うのだった。

「なんだ、お前。桃眼が『治すだけ』とでも言いたいのか?」
「え?違うの?」
「違うね。医療、療蔚の術であることに代わりはないけど。でも考えても見ろよ?」

薪の例え話に穂琥は絶句した。

とある一つの病院で起きたと仮定する酷い事件。あくまで過程であり事実ではない。

一人のドクターがいた。そのドクターが抱える患者は一日に30人を看るとする。その30人は健康診断で来ただけのいたって健康な人であったとする。そしてそのドクターがその患者全員に嘘の診断を渡す。

『癌になっています』

すると患者はどうする?

『それを治す手立てはありませんか?』

ドクターが応える。

『有りますよ。この薬を毎日飲んでください』

手渡した薬を嬉しそうにもらっていく患者たち。それはドクターが今までに勝ち取ってきた信頼の証。そうして薬を持ち帰った患者たちはその日のうちに全員死んでしまった。原因は癌の特効薬としてもらった薬。その薬は特効薬でもなんでもなくてただの毒薬。それを飲めば瞬時に死に至る。

「な？医者の力って結構怖いんだぜ？」

「いや！あんたのその思考のほうが怖い！！」

苦情を言う穂琥に涼しい顔をして受け流す薪。要するに、『医療』というのは『ミス』というだけで人を死に追いやり殺してしまう。それほど恐ろしいものがある。

血が詰まってしまった病にかかったらそれを治すために血が流れやすいように眞稀を送ってやるとする。しかしだ。血が詰まっていないで健常なその血管にその流れやすい処置を行えばその血流は急激なものとなってきっと死に至るかもしれない。

眞匏祇の領域になってくれれば神経経路を自在に操る事だって桃眼であれば容易くなってくるだろう。そんな神経経路を切断してしまえばどんなに強情なものでもたつことすらできなくなってしまう。そうして立てなくなってしまった相手は最早翼を＆ａｍｐ；＃２５４４５；がれて地を這う虫けら同然。後は眞稀を流し込んで血液の

流れ逆流させたり、そもそも臓器器官の経路を断ち切ってしまえば直に魂石だって割れて・・・

「だぁぁぁ！！！わかった！！わかった！！もういい！わかったから！頑張って習得しますから！！！」

薪の言葉を遮って穂琥は耳を塞いで叫ぶ。薪はわかればよろしいといてさっさと食器を片付ける。

「とはいっても今のは例えだぞ？」

「わかってるわい！それを本気でやれって言うなら私は薪と家族の縁を切るわ！！」

「まぁ、そうわめくな。さて、移動するぞ」

薪は穂琥を椅子から強制的に立ち上がらせるとそそくさと歩き始める。仕方なく穂琥はその後に続くのだった。

眞匏祗の世界と違って地球という世界は酷く狭い。そして柔らかく脆い。そんなところで本気の修行が出来るわけも無く。そこで薪はい空間を作り出したのでした。

「薪って本当に何でもできるのね・・・・」

「そんなわけ無いだろう。儒楠だって出来るさ。上級クラスになればこれくらい出来る」

薪は簡単そうに言って扉を開く。その先は驚愕するほどの広さ。地面は土。岩場のようにゴツゴツとした場所がたくさんある。もし人がいれば簡単に隠れる場所を作ることができそうだった。

「ここで修行を・・・。え、でもどうやってするの？薪にぶつける

わけには行かないでしょう？」
「当たり前だろう。いくらオレでも死ぬよ」
薪は呆れたように笑った。薪が幼少期に造ったオリジナルの修行法。それを今の自分なりに改良したものを穂琥にやってみるという。
「つまりお前は実験台だ。頑張れ」
「え・・・・」
薪のあっさりとした言葉に返すことも出来ずに穂琥は固まる。誰にも試したことの無い薪だけの習得方。故に、他のものでもそれが使えるかは疑問なところだった。
見えない敵を討つ為にはどうしたらいいか。一つは薪のような感知能力の高いものが周囲を警戒しながら相手を見つける。ただ、これでは常に気配を感知し続けなければならないために集中力を相当要する。それに相手が極度に眞稀を抑えてしまえば見つけることはまず出来ない。そこで、桃眼。桃眼は『目』の力。故に『視る』力。隠れ潜んだ相手を視覚的に捉えることが出来る。
「簡単に言えばサーモグラフィか？」
「ほう・・・」
薪の例えに納得する穂琥。
「ま、ひとまずは眞稀の感覚になれていこう。はい、開眼」
「は、はい・・・」
薪に言われるままに開眼する。ぼわっとした煙のような靄のような、そんな世界が目の前に広がる。

「少し曇っているなぁ・・・。さて、どうするか」
どうやら今の薪の発言からこの靄がかかっている状態は通常の状態ではないらしいことが把握できた。
「もう少し眞稀を上げて・・・そうそう、その辺でストップ。維持して・・・」
薪のアドバイスを受けながら桃眼の修行に入った穂琥だった。
何とか目が大分桃眼の眞稀に慣れ始めた頃、薪が次の段階へ移行することを伝えた。
「今からダミー人形を2体作るからそれを時間内に潰せ。制限時間は２０分」
「え？２０分？！そんなに？！たった2体なのに？」
「言ったな、『たった』と。よし、頑張れ」
薪が手を上げて穂琥を応援する。その態度に妙な焦りを覚えた穂琥はちなみに時間内にもし潰すことができなかったらと尋ねると薪はこれまたさわやかな笑顔で答えた。
「罰ゲーム♪」
薪の語尾に♪が付いただけではなく、ウィンクまでしている以上、時間内に潰せなかったらきっと穂琥が潰される。穂琥は普通じゃないほど力を入れてダミー捜索の用意をした。
条件は二つ。一つ。時間内に2体のダミーを見つけて潰すこと。

二つ、その場から一歩も動かないこと。これだけ守れば後は何をしても好きにしていいと言うこと。薪のスタートの合図でいつの間に隠したか知れないダミーを捜すこととなった。

「うわっ。見つけにくそう・・・」

ダミー自体に宿る眞稀は薪の組み込んだ眞稀で薪、そのもの。だから見つけることは結構簡単かと思っていたがそうもいかない。隠れるのがうまいわけだし、そもそも陰に隠れて見えないわけだから桃眼の力を引き出さなければきっと見つけることは出来ない。

そんな折に、視界の隅に妙な気配を感じた。

「アレは・・・？」

「お、見つけたか」

「いや、わからないけど・・・」

薪に言われて眞稀を放つ。するとダミーが小さく爆発した。あと一体ということで必死になって探す穂琥。しかし何処をどう見てもそれらしいかげない。本当に隠しているのだろうか。

目が急激に痛み始める。少しだが涙も出てきそうだった。それでも穂琥は目を凝らす。ぐっと力を入れて揺らぐ気配を察知する。きっとそれは薪の隠したもう一体のダミー。穂琥は目がつぶれそうなほど痛いのを我慢して眞稀を放ってダミーを破壊する。その途端、穂琥は膝の力が抜けて前に倒れた。

「おっと」

薪がそれを受け止めて静かに座らせる。

「限界だな。慣れない開眼を続ければ身体に支障をきたしてしまう。少し休憩だな」

穂琥は小さくはいとだけ答えて近くにある岩に背を預けてはっとする。

―薪ってこんなに優しいか?!

そんな疑問が浮かんでから薪を凝視しためにに薪から冷たい視線が帰ってきた。それを軽く避けながら穂琥は必死で考えた。薪は一体何を考えているのだろうか。こんなにやさしいのは何か裏でもあるのだろうか?そう考えたところで所詮は穂琥の頭。薪とは違う。わかるわけも無く。体は休んだが、結局のところ頭が休まない状態で休憩時間は終わってしまうのだった。

第十三話　修行に関しての千思万考

眞稀を練ることに集中できずに薪にどやされる。休憩をやっているんだからしっかりしろと薪に叱責を食らう。

薪の次の指令は先ほど同じダミー潰し。ただし今回は2体ではなく5体。穂琥は一瞬だけ文句を言ったが完全にスルーされたため諦める。

一体目は案外すんなり壊すことに成功した。ただ、あちこちに漂うのは薪の眞稀。何処にあのダミーがいるのかはよくわかりにくい。よって、これだと思っても一般の眞匏祇の可能性も秘めている。しかし、ここにいるのはダミーとそれ以外の眞稀。

「おりゃ！」

とりあえずだから勘で眞稀を放つ。見事に二体目のダミーを破壊する。しかし、それをカウントした薪からキツイ一言が。

「次勘で打ったらオレがお前を打つぞ」

「は、はい・・・申し訳御座いません・・・」

謝罪を全力でして意識を集中させる穂琥だった。

残り時間あと半分を宣告されて穂琥はかなり焦った。まだ、二体しか破壊できていない。あと三体もいるというのに。

―ダメだ！このままじゃ大変だ！殺される！薪に！確実にヤられる！！

穂琥は自分に妙な暗示をかけるように頭の中でそう呟く。これをもし薪が聞くことが出来たらきっと呆れるだろう。

―オレは鬼か

急激に穂琥の集中力と眞稀が上がったので薪は首をかしげた。ここまで穂琥が眞稀を上げることが出来るのだろうか。

何とか集中して三体目のダミーを破壊する。それからさらにダミーらしきものを発見して穂琥は眞稀を放った。すると見事にダミーが破壊されるのを確認した。よしっ、とガッツポーズを決めようとした瞬間、後頭部に激痛が走った。

「ぬふぁ！？」

「勘で打つなと言っただろうが」

薪の見事なとび蹴りを喰らった穂琥だった。

「す、すいません・・・」

言葉に出したり表情に出したりしていないのに薪は何故勘で打ったとわかるんでしょうかね、そんな疑問を抱きながらも穂琥は最後の一体を探すことに専念した。

「はーい、残り二分～」

やる気があまり感じられない薪の言葉にむっとしながらも穂琥は必死で集中力を高める。

ある程度のめぼしをつけてそのダミーがいそうな場所を凝視しているというのに全く見つけることができないのは一体何故だろうか。穂琥は必死に考える。相手は知らない眞稀じゃない。薪の眞稀だ。感知しやすいはずなのに。そんな事を考えているとちらりと視界の隅で空間の動きを視た。

穂琥は合点がいった。どうりで目星をつけて見つけることが出来ないわけだ。相手は移動をしていたのだ。それがわかれば簡単な話だ。その移動して出来た空間のゆがみを感知してそれを追えば絶対に捉えることが出来るのだから。今まで気づかなかったことが不思議なくらいに。

「はい、残り2秒。ギリギリだったな」

ダミーを破壊してから薪が言ったので穂琥はがっくりと腰を落とした。

「ま、よく出来たよ。ご苦労さん。次はもっとレベル高いから頑張れよ。ってなわけで休憩な」

「え・・・あ・・・・はい」

薪のその甘い言葉の裏には一体何が隠されているのだろうか。一瞬、儒楠が化けているのかと思ったが桃眼が療蔚の技である以上、儒楠が教えることなどできるわけが無い。裏の読めない薪の優しい行動がどこか怖いような・・・。

「で？何？」

「え？」

突然薪が尋ねてきたので穂琥は呆然とした表情を浮かべた。岩に腰

を下ろして頬杖を付いている薪の表情はどこか面倒くささを感じさせた。

「さっきから睨むような、食い入るような。よくわからんけど」

「あ・・・いや・・・ちょっと気になって」

穂琥は少し俯きながら応える。薪に今まで思っていたことを言うのもどこか申し訳ないような気もした。せっかく優しく接してくれているのにそんな事を言っては酷いではないか。

「馬鹿の癖に頭が休まない状況を作るな。集中力が大事なんだからさ」

その薪の一言にぷつーんと来た穂琥は何処が優しいだ、絶対に嘘だ！と頭の中で怒号を上げながら薪に抗議をスタートする。

「うるさいな！馬鹿って！どーせ私は薪みたいにちょぉっと違うこととして相手を陥れるようなマネできませんものねぇ～」

「・・・？何を言ってんだ？」

「修行って言ったら薪、全然優しくないじゃん！それなのに今回優しいからさ！なんか調子狂っちゃって頑張んなきゃ～みたいに思ってさぁ？」

罵倒の如く言い切った穂琥の言葉に薪は案外ぽかんとした表情をしていた。あまりのその表情に穂琥は何、と尋ねると薪は突然何かが破裂したように笑い出した。

「っふ、アハハハハ！くく・・・ふふ・・・アハハハハ！」

途中で笑いをこらえようとしているのは見て取れたがどうにも耐え

ることが出来ないようで噴出してしまっていた。突然そんな風に薪が笑い出したので驚いて穂琥は目を丸くした。薪がこんなに笑っているのを見た事がない。

「何、お前・・・ずっとそれを考えていたの？」

薪の笑いを堪えたその質問に無言のまま頷くと薪はさらに噴出して笑い始める。

「ブフッ・・・！！くくく・・・ぐふっ・・・フフフ・・・アハハハ！！」

あまりに薪が笑うので穂琥はだんだん赤面してきた。薪がこんなにも取り乱して笑うところなんて見た事ない！何だよ、これ！レアだな、これ！ムービーにでも撮っておくか！そんな風に思いながらも穂琥は目の前の薪の状態にただ恥じらいを感じながら不貞腐れた表情をするので精一杯だった。

「いや、ゴメン・・・くくふ・・・ふふ・・・は～・・・。ククク・・・！！」

落ち着こうとしているのか笑おうとしているのかわからない。くどいようだけどもう一度。こんな薪見た事無い。

「さて、次行こうか」

「ちょぉお！？質問！！私の質問は？！」

あまりにさらっと薪が次に行くことを言い始めたので穂琥は薪に勢いよく突っ込む。

「どーーーでも、いいし。そんな事」

薪の表情にはまだ笑いが残っている状態でそんな事を言う。いつもの薪ではないと穂琥は猛抗議をする。薪は仕方無さそうになんとなくだ、そんな風にやっているだけだ、と応えた。

「いや、答えじゃないからね！？それ！」

穂琥の言葉に薪はまだまだ笑みの残った顔で馬鹿だから、と付け足す。ぷつんっと切れる穂琥の頭の中の何かの糸。

「なんじゃいそらぁぁぁ！？偽もんだ！偽もんだ！！薪はこんなんじゃないしぃ！偽―！本物どこだー！」

「いや、ここにいるし」

「嘘だ～！偽だ！そんな笑わないもん！！」

穂琥のその言葉に薪はまた噴出して笑い始める。本当に一体薪に何があったのか知りたい穂琥だった。

「くっくっく・・・。本当に馬鹿な」

薪はまだ笑い続ける。一体何のツボにはまってしまったのだろう。

「休憩だって簡単にくれるじゃん！」

「当たり前だろう？今までのとは全く違うんだから。くく・・・。桃眼だぜ？休憩もなしにやったらお前、死ぬぞ。それでもいいんならいつも通りやるけど」

「いや、すいません・・・」

「はい、次やるよ」

なんとなく薪には誤魔化された様な気もしたけれど仕方なく穂琥は集中することに決めた。

次のステップは今まで薪の眞稀だけだったのを一般の眞稀を含めた中から薪の眞稀のみを探して打つこと。制限時間は１０分。

「ま、もし間違えた場合は・・・」

「言われなくてもわかります・・・・」

「よろしい」

そんな会話をしてからスタートの合図。穂琥は一気に開眼する。するとその目に映ったのは信じられない数の眞稀たち。これほどの眞稀を薪は一体どうやって集めたのか疑問だが、それはさておき、所謂この状況は街中と同じことだ。この中から的確に相手を探し出さなければならないということ。今までと違ってあちこちで眞稀が動いているせいで空間のゆがみだけを探せばいいなんてものではない。歪み放題だから。

―苦戦しているな・・・。穂琥ならできると思ったんだけどなぁ

薪は穂琥をみてそんな事を思っていた。全然わからないと途方にくれ始めてしまったので薪は仕方なくヒントを与える。

「一つ！いくら桃眼といえど、観ようとするな。感じ取れ」

「え？あ、はい」

穂琥としては思わぬ薪からのヒントに戸惑う。しかし、それを何とか素直に受け止めたところで見ようとしなくて感じ取るにしても全くわからない。

「ふたっつ。桃眼に頼り切るな」
「え？あ、自分の感覚も・・・？」
「そういうこと」
腕を組んで立つ薪の姿を軽く見てから穂琥は首を傾げる。一体何故こんなに優しくしてくれるのだろうか。それほど桃眼という技が凄いのだろうか。

とにかく、今はそんな薪の不可解な親切を真に受けてしっかりと集中することにした。ふと思ったが、自分の間隔も頼りにしろと言うことは決して『観る』だけが桃眼の力ではないということかと思い当たる。感じ取れといった薪の言葉を理解して穂琥はその瞳を閉じる。そうしてふと視界の隅にうごめく光の束を垣間見る。そこでようやく気づく。観ようとするからダメなんだ。相手は隠れ潜んでしまっているのだから『観よう』としても観られるわけもなかったのだ。

「この感覚は薪の眞稀だ！」
穂琥は急いで眞稀を放って見事にダミーを破壊した。それと同時に大きなため息をついて膝を突いて息を切らせる。そして発っている薪に残りの時間を尋ねる。
「いや、気にしなくていいよ」
薪はそう言ってにこりと笑う。きっと時間内に収まったのだろう。穂琥はほっとして地面に大の字に倒れる。
安心したような穂琥の表情を横目で見ながら薪は時間を確認する。

―ま、初めてだし多少の時間オーバーは許してやるか

そんな事を思いながら小さく笑う。

「上出来、かな」

「え？私上出来！？」

思わず出た声に穂琥が鋭く反応したのでとりあえずそれを肯定した。

それを聞いた穂琥がひたすら嬉しそうに騒いでいるので薪はだんだんバカらしく思えてきた。

「図に乗るな」

「いでっ・・・」

軽く穂琥の頭を叩いて穂琥を鎮圧した薪だった。

第十四話　目の前の大きな壁

次の目標は身体のどこに魂石があるのかを探し出すこと。その魂石を、破壊するにしろ治すにしろ何処に在るかわからなくては施しようが無いからだ。

「え？魂石の位置？みんな同じじゃないの？」

穂琥の言葉に薪は頭を抱える。そしてさも可哀想な子を見る目で見つめた薪だった。魂石は個々の自由に場所を決めて個々で守っている。薪の場合は右の脇腹辺りらしい。穂琥は自分で何処にあるか知らないが、それを薪に言うとまた叱責を喰らいそうだったので黙っていることにした。

「とりあえずは魂石の破壊をしよう。とはいっても魂石を破壊するなんてとんでもないことはできないからオレが擬似的に魂石を眞稀で作るからそれを壊すように」

「はい」

持っていた眞稀を薪はほいっと上に放り投げた。そしてぱっと消えたその眞稀を見ながら軽く薪は言った。

「隠したから探して壊せ。制限時間１０分」

「え？！１０分！？それ短・・・」

「はい、スタート」

「ふえぇぇん！」

文句を言う時間も無く穂琥はそれを探すことに宣する。

多少の時間はかかったが、そこそこ簡単に見つけることが出来た。よって次は体内にある魂石を探すこと。この広い空間から見つけることが出来たのだからきっと簡単だろうと高をくくっていた穂琥は正直心が折れた。この小さな『身体』という媒体にはその魂石と同調した眞稀が流れている。よって見つけることが全く出来ない。あちこちに似たような塊が滞留している。全く困ったものだ。

薪は穂琥の様子を見ながらどうするべきか悩んでいた。ここまで長い時間桃眼を使っていていいものかわからない。薪は無論戦鎖であったからこんな長い間使っていたらへばるどころか下手したら失明、あるいは死ぬかもしれない。けれど相手はあの紫火の血を濃く継いだ穂琥で療蔚だ。悩む。

「痛い！」

急に穂琥が目を押さえて座り込んでしまった。薪は慌てて穂琥に駆け寄った。

「大丈夫か！？」

「う、うん・・・なんとか・・・ごめんなさい・・・」

「・・・。いい、謝るな。閉眼できるか？」

「う・・・」

穂琥は辛そうに目を瞑っている。薪はそんな穂琥の目にそっと手を当てる。そして強制的に穂琥の目を閉じさせる。そしてふらついている穂琥を抱えて平らな座れる場所へ移動する。

「ごめんなさい・・・」

「謝るなって。無理をさせたのはオレだ。謝るのはオレの方だ、悪かった」

「そんなの・・・・」

薪のその言葉に穂琥は続ける言葉が出なかった。休憩しようといった薪の言葉に頷くだけだった。

「オレは用があるから何かあったら声を掛けろな」

「え、あ、うん。用って？」

「オレだって修行くらいしないとな」

薪はそう言って穂琥から少し離れたところに腰を下ろした。それからピクリとも動かなくなってしまった。果たしてそれの何処が修行なのかわからないが穂琥はただその様子を見ていた。

穂琥はそっと開眼する。そして魂石の入っている『身体』へ目をやる。やはりどう見ても何もない。痕跡らしきものを発見することは全く出来ない。ため息をつく穂琥はそっと閉眼しようとして辺りが暗くなったことに気づいた。暗いとかそういう問題ではない。視界が無くなった。桃眼の無理のし過ぎで視界の線を切ってしまったのかと焦ったが、突如、目の前に巨大な見たこともない大きな白い扉が表れた。

「な、な・・・・何これ！？」

仰天する穂琥だが辺りを見回してもそれしかない。この暗闇の中でその扉は白く光って浮き上がって見えた。穂琥にとってそれは扉というより何処までも続く壁に見えた。

ふと、その扉の麓に人影を見つけた。

「あの・・・？」

蹲ってまるで眠っているようだった。全身を布で包み顔すらその布で見えない。しかしその姿は印象的だった。その布の上から鎖で巻かれ拘束されていた。とても小さな小柄な身体に。

「あの・・・よろしいでしょうか？」

穂琥の言葉にその身体がもぞっと動く。そして顔も上げずにそれは声を発した。

「随分と可愛らしいお嬢さんだねぇ」

声からして老婆のようだった。しゃがれた声で喋るのも辛いのではないかと思えるくらいの声だった。

「ふぅん。以前来た者より頭の出来が違いそうだなぁ」

「んな！？私の頭が悪いとでも言いたいのかー！」のかー！」のかー！」

広いこの空間で穂琥の声は木霊した。その老婆は顔が見えないからなんとも言いがたいが明らかに驚いた様子を見せ、その後、さも面白そうに笑った。

「くくく・・・。我が言った『出来が違う』とはそういう意味ではないさ」

小さく微笑するその声は聞いた感じではそうでもないが何処と無く穂琥はこの老婆の心が本当に笑っているように感じた。

「我は門番。この門の番をしている」

老婆はそう言った。扉だと思っていたコレは何かを繋ぐための門だったらしい。

第十五話　大きな門の向こうにあるもの

こんなに大きな門、見たことない。

目の前のそれを見て穂琥にはそれしかいえなかった。しゃがれた声で老婆、門番は不気味に笑う。

「ふっふっ。以前来た者もそのようなことを言っておったなぁ」

「以前、さっきもそう仰っていましたけどここには他にも人がいらっしゃっているんですか？」

穂琥の問いに門番は肩を揺らしてくっくっと笑った。ここに来るものは皆『人』とは言わない。穂琥はそれを聞いてはっとして頭を抱えた。また薪に怒られる。

―こんなに大きな門は他に存在しないだろう

門番が急にそんな事を言った。穂琥が首を傾げると門番は前回ここに来たものがそう言ったと伝えた。

「ここは何なのですか？」

「門、さ」

それはわかるのだけれど。知りたいのは何の砦となっているのかということ。

「果て無き力を手に入れんとする者、この門を潜るが良い。さすればその果て無き力を授けよう」

門番の声が不気味に響く。過去にこの門の前に来たものの数は忘れた。しかし潜っていった者の数ならしかと記憶している。

「わずかに2祇だ」

その数に穂琥は身を引く。数多くの眞匏祇がここを訪れたことはわかった。しかし通ることができたのはその数。ならば・・・。

「私には無理ね」

穂琥は視線をとして静かに笑う。

「弱いからか？護って貰っておるだけだからか？そんなものは関係などありはしないさ」

門番の声が強く響いた。

「皆一様にして持っておらんかっただけのこと。とある、大切な『あるもの』が」

門番は低く声を唸らせる。

「ぬしにはあるか？」

「ある・・・もの？」

それが何か穂琥には知れない。以前来たものは少し悩んだ後に自信ありげにそれを自分は持っていると言って潜って行ったそうだ。

自分が持っているあるものに、自分で気づくことが出来たとき、この門を開けることが出来るという。穂琥は悩んだ。おそらく今の自分にそれは無い。いや、あるのかもしれないけれどそれが何であるかを知ることが出来ない。ならばここを無理に通ろうとする意味は無い。では、穂琥のするべき事は一つだ。

「門番様。お願いです。ここから出してください。今の状況ではいくら考えても私には無理です。ですから一度出してください。そしてその答えがわかったとき、再びここにお招きください」

「くっくっくっ。面白いなぁ。良いだろう、招いてやろう。ただし我を呼ぶぬしの声がこの耳に届けばな」

「きっと届かせてみせます」

門番は鼻を鳴らすように笑う。そして目を閉じることを促す。穂琥はそっと目を閉じた。その時脳裏にふっと何かが過ぎって行ったような気がしたが急に周囲の感覚が変わって体が急に揺さぶられたので驚いて目を開けた。

「穂琥！」

目の前には今までに見たこともないくらい真っ青な顔をした薪の顔があったのでそれに驚いた。

「薪・・・？」

「穂琥・・・？大丈夫か？　あまり心配かけさせんなよ・・・」

心底ほっとしたように薪は穂琥から離れた。

「薪、顔真っ青だよ？大丈夫？」

「はあ～・・・。誰のせいだと思ってんだよ・・・。急に眞稀すら感じなくなったから驚いてお前を見たらまるで死んでいるみたいだったから・・・焦ったよ・・・」

薪の心底心配している顔を見てなんとなく可笑しくなってしまったことを恥じながら穂琥は大丈夫だということと心配をかけた謝罪と礼を述べた。肩を落としてため息をつく薪の顔色が大分元に戻ったので安心した。

ともかく、身体の状態はとてもいいと言うことで修行に戻ることにした。薪は少し心配そうだったけれど大丈夫だということに負けて修行に移った。

事もあろうか、あれほど出来なかった魂石探しを意図も簡単にやってのけてしまった。その様子に薪は物凄く驚いていた。穂琥自身も驚く。先ほどあった『出来事』が原因だろうか。

次のステップも案外簡単にできてしまい、薪が不思議がっているけれど何より驚いているのは穂琥自身のため薪のほうもどうしたものか悩んでいるようだった。けれどもできたことに変わりは無いわけで次のステップへと移行する。

今度はついに攻撃に移る。身体に何らかの支障をきたす技。ただし致命傷を与えてしまっては死んでしまうのである程度動けなくなる程度のもの。

さっきまでとは打って変わってまるっきりできなくなってしまった穂琥。力を入れすぎると壊してしまうのでそれをしないために力を抑えるけれどそれでは何もできないので少し力を入れるとそのダミーは簡単に壊れてしまった。

「ん・・・。ゴメン、薪。少し休憩していい・・・？」
「いいよ」
予想外にすんなり休憩許可が出たので少し拍子抜け。しかしやっている技が技だし、先ほど穂琥が目を激痛で傷めているので薪もあまり酷使させられないのだろう。

第十五話　大きな門の向こうにあるもの

こんなに大きな門、見たことない。

目の前のそれを見て穂琥にはそれしかいえなかった。しゃがれた声で老婆、門番は不気味に笑う。

「ふっふっ。以前来た者もそのようなことを言っておったなぁ」

「以前、さっきもそう仰っていましたけどここには他にも人がいらっしゃっているんですか？」

穂琥の問いに門番は肩を揺らしてくっくっと笑った。ここに来るものは皆『人』とは言わない。穂琥はそれを聞いてはっとして頭を抱えた。また薪に怒られる。

―こんなに大きな門は他に存在しないだろう

門番が急にそんな事を言った。穂琥が首を傾げると門番は前回ここに来たものがそう言ったと伝えた。

「ここは何なのですか？」

「門、さ」

それはわかるのだけれど。知りたいのは何の砦となっているのかということ。

「果て無き力を手に入れんとする者、この門を潜るが良い。さすればその果て無き力を授けよう」

門番の声が不気味に響く。過去にこの門の前に来たものの数は忘れた。しかし潜っていった者の数ならしかと記憶している。

「わずかに2祇だ」

その数に穂琥は身を引く。数多くの眞匏祇がここを訪れたことはわかった。しかし通ることができたのはその数。ならば・・・。

「私には無理ね」

穂琥は視線をとして静かに笑う。

「弱いからか？護って貰っておるだけだからか？そんなものは関係などありはしないさ」

門番の声が強く響いた。

「皆一様にして持っておらんかっただけのこと。とある、大切な『あるもの』が」

門番は低く声を唸らせる。

「ぬしにはあるか？」

「ある・・・もの？」

それが何か穂琥には知れない。以前来たものは少し悩んだ後に自信ありげにそれを自分は持っていると言って潜って行ったそうだ。

自分が持っているあるものに、自分で気づくことが出来たとき、この門を開けることが出来るという。穂琥は悩んだ。おそらく今の

自分にそれは無い。いや、あるのかもしれないけれどそれが何であるかを知ることが出来ない。ならばここを無理に通ろうとする意味は無い。では、穂琥のするべき事は一つだ。

「門番様。お願いです。ここから出してください。今の状況ではいくら考えても私には無理です。ですから一度出してください。そしてその答えがわかったとき、再びここにお招きください」

「くっくっくっ。面白いなぁ。良いだろう、招いてやろう。ただし我を呼ぶぬしの声がこの耳に届けばな」

「きっと届かせてみせます」

門番は鼻を鳴らすように笑う。そして目を閉じることを促す。穂琥はそっと目を閉じた。その時脳裏にふっと何かが過ぎって行ったような気がしたが急に周囲の感覚が変わって体が急に揺さぶられたので驚いて目を開けた。

「穂琥！」

目の前には今までに見たこともないくらい真っ青な顔をした薪の顔があったのでそれに驚いた。

「薪・・・？」

「穂琥・・・？大丈夫か？　あまり心配かけさせんなよ・・・」

心底ほっとしたように薪は穂琥から離れた。

「薪、顔真っ青だよ？大丈夫？」

「はあ～・・・。誰のせいだと思ってんだよ・・・。急に眞稀すら感じなくなったから驚いてお前を見たらまるで死んでいるみたいだったから・・・焦ったよ・・・」

薪の心底心配している顔を見てなんとなく可笑しくなってしまったことを恥じながら穂琥は大丈夫だということと心配をかけた謝罪と礼を述べた。肩を落としてため息をつく薪の顔色が大分元に戻ったので安心した。

ともかく、身体の状態はとてもいいと言うことで修行に戻ることにした。薪は少し心配そうだったけれど大丈夫だということに負けて修行に移った。

事もあろうか、あれほど出来なかった魂石探しを意図も簡単にやってのけてしまった。その様子に薪は物凄く驚いていた。穂琥自身も驚く。先ほどあった『出来事』が原因だろうか。

次のステップも案外簡単にできてしまい、薪が不思議がっているけれど何より驚いているのは穂琥自身のため薪のほうもどうしたものか悩んでいるようだった。けれどもできたことに変わりは無いわけで次のステップへと移行する。

今度はついに攻撃に移る。身体に何らかの支障をきたす技。ただし致命傷を与えてしまっては死んでしまうのである程度動けなくなる程度のもの。

さっきまでとは打って変わってまるっきりできなくなってしまった穂琥。力を入れすぎると壊してしまうのでそれをしないために力を抑えるけれどそれでは何もできないので少し力を入れるとそのダミーは簡単に壊れてしまった。

「ん・・・。ゴメン、薪。少し休憩していい・・・？」

「いいよ」

予想外にすんなり休憩許可が出たので少し拍子抜け。しかしやっている技が技だし、先ほど穂琥が目を激痛で傷めているので薪もあまり酷使させられないのだろう。

第十六話　桃眼の持ち主

「桃眼って凄い技・・・？」

ずっと聞きたいことがあるのを堪えていてついに堪えきれずに休憩している薪に尋ねる。薪はそんな穂琥の唐突の質問に首をかしげた。しかし薪は軽くそれを流す。

「まぁね」

押し黙る薪と穂琥。どちらかというと黙っているのは穂琥のほう。薪はただ休息をしているだけだから。

「桃眼って何祇持っているの・・・？」

「は？」

突然の質問に薪は無愛想に答える。

「一祇は薪。もう一祇はお母様。他には・・・？」

「何を訳わからんこと言っているのやら。桃眼を持っているものが何祇いるかなんて分かるわけ無いだろう？」

「え？」

「そこまで慤夸は暇じゃねぇよ。桃眼を開眼した奴の数なんて一々数えてられねぇって。過去に亡くなっていった歴代の慤夸妃たちだって桃眼は使えていたんだから」

「え・・・？そうなの？」

「あ？当たり前だろう？慤夸の嫁だぞ？その位の力使えなくてどうする」

薪の呆れたような回答に穂琥は俯いた。てっきり穂琥は先ほどの門番の護っていた門がその桃眼への道かと思っていた。あの門を潜れば桃眼を使えるようになるのかと思っていたけれど。でも、そういうわけではないということが今わかった。ではあの門は何だろう。わからない。

「私なんかが桃眼を仕えるようになるかな・・・」

自信の欠片も無いその台詞に薪はふっと穂琥を見据える。穂琥はその薪の瞳に飲み込まれてしまいそうでさっと目を外した。

「できるさ」

沈黙の後に薪がそう言った。

「どうしてそんな風にいえるの？まともに技だって使えないのに・・・、鈍いし」

「鈍いのは性質だ、関係ない」

否定はしないのね。

「オレの妹だしな。それに・・・」

薪は言葉を切る。穂琥はその続きを待ったけれど薪はその続きを言わずになんでもないと区切ってしまった。

「とにかく出来る」

薪はやはりそうやって言い切った。そこまで言い切ることの出来る薪の力がどこか羨ましい。

「最初から出来る奴なんて居ないさ。できたらつまらないだろう」
「薪はつまらないの？」
「オレが最初から何でも出来るみたいな言い回しは止めろ」

薪とて苦労してここまで来ている。戦鎖でありながら療蔚の技が使えるのは確かに才能かもしれない。それでもその技を使うためにどれほどの苦労をしてきた事か、穂琥にはわからないのだから。

「出来ないから苦労して頑張ってそれを手に入れるんだろう？お前は何のために今、頑張ってんだ？」
「え？」
「オレはこう見えても結構お前の意見を尊重しているつもりだぜ？桃眼の力を使いこなせるようになりたいと切に願ったのは穂琥だろう？」

薪に言った記憶はあまり無い。それでも確かに桃眼の力がちゃんと使えるようになりたいとは願った。それを薪は汲み取ってくれたのだろうとしか思えない。

「何のために今、桃眼の修行をしているんだよ。そこまではオレもわからないけど、付き合ってやってんだ。しゃきっとしろ」
「・・・うん。ありがとう。なんかすっきりした」

そうだ。自分のやりたいことのために力を得たいんだ。『果て無き力』が本当に凄いものだというのなら得たい。あの門を潜りたい。『あるもの』が自分の中にあれば。いや、そもそも穂琥はもしかしたらその『あるもの』が主体となって力を得ようとしているのではないだろうか。

わからないなりに穂琥は考える。それでも今はそれを放って置いて修行に専念する。

疲れ果てて修行部屋から出てきたら外はもう闇に覆われていた。流石にこんな長い時間やっていたら大変だろうと薪は肩を落とす。ともかく、今日はもう終わりでまた明日にしようという事になった。

どっかりとベッドに飛び込んだのは随分後だった。疲れて何も考えることが出来ない。このまま眠ってしまいそうだ。

―あるもの・・・

ふっと頭を掠めた何か。穂琥ははっと目を見開いた。そうだ。持っているのではないか？自分が求めるものこそ、その『あるもの』かもしれない。弱い。自分はなんて弱い存在。それでも思うことくらい、してもいいと思ってここまで来ているのだから。穂琥は見開いた目をゆっくりと閉じて心の底から叫ぶ。

―再びあの門の前へお連れください

第十七話　内に秘めた心（前編）

身体がぐっと回転して強制的に立たされたような感覚になる。そうして目を開けると巨大なあの門がある。

「よく来られたね、お嬢さん」

門番の低い声が鳴り渡る。

「連れて来て下さったのは貴女でしょう」

「くっくっくっ。力なくては来る事は出来んよ。して？」

「はい。ここは大いなる力の持ち主が通ることの出来る門」

「大いなる・・・。なるほど、確かに。その力とは？」

門番が低く唸る。穂琥はその門番をしっかりと目に移してから巨大な門へと目を移す。そしてまるでその門に語りかけるように話し始めた。

「全力を掛けて護りたいものがある。それはいつも強くて私の前に居て。飄々としていてまるで霞のようにつかめなくて。それでもそれは霞。吹けば飛んでしまう事だってある。そんなときは私だってそれを護りたい。護る力が欲しい。敵を倒す力なんて要らない。仲間を、大切なヤツを、護りたい。私は誰かを護れるそんな力が欲しい！」

穂琥の声に門が呼応する。

「桃眼の力、ワタクシにお与えください」

声が木霊する。この暗闇の中で。その木霊に反応するようにぼうっと輝いていた白い門が急に強い光を放った。穂琥はそっと手を前にかざす。そして門に触れるでもなくそっとその手を前に押し出す。すると門がゆっくりと開いていった。

「そんな事・・・」

門番が震える。触れることなく門を開ける。そんな事があるのだろうか。いや、現に目の前でそれが起きているのだから。この娘の『想い』がそれほどまでに強かったということだろう。

穂琥はそっと門のほうへ歩いていく。そして門番の前まで来て足を止める。

「門番様。一つ、聞きたいことがあるのです」
「何を・・・？」
「貴女様のお名前を伺いたいのです」

門番は肩をぶるっと震わせた。

「お前らは不思議な生き物よの。いや、しかし。ぬしがそれを聞いたところで何になる」
「貴女様はただの門番では在りませんでしょう？なんとなくわかるのです。だからどうか、名をお教えください」

そんなに長い時間を過ごしたというわけでも無いにも関わらず一体何故そこまで深く心に触れることが出来る。いや、きっと時間ではないからだろう。心が触れ合えれば時間なんてきっと関係ないのかもしれない。

「いかんよ。いけないのだよ。我はここに在らねばならぬのだから」
門番は酷く低い声で唸っていた。そのしゃがれた声を出すのももしかしたら一苦労なのかもしれない。その身体に巻きついた鎖がその身を締め付けいためているのかもしれない。
「ぬしは結局何もわかっていない。我が何であってどうしてここに在るのか」
「・・・いいえ、少しならわかる気がします。貴女様は・・・」
「ゆけ。門が閉まるその前に」
門番は穂琥の言葉をがむしゃらに切ってそう言い放った。穂琥はその哀れな門番の姿を目に映してからふっと俯いた。
「また来ます」
「来られぬよ。門を潜ったものは二度とここには来られまい」
穂琥はそんな門番の言葉をまるで無視するようににこやかに笑って足を踏み出した。
「勝手にするがよい」
門番の声が耳の奥で聞こえた。そうして穂琥は光り輝く門の向こうへと消えていくのだった。
閉門されまた静かな闇が広がったとき、門番はやっと身体に入っていた力に気づきその力を抜いた。
「来られぬよ。戻ってなど来られぬというのに。あの兄妹はどうしていつもそう、期待させるのだろう」

嘲笑するように門番は声を立てた。そしてまた深い孤独と闇に沈んでいくのだった。

第十八話　内に秘めた心（後編）

暗闇の中を歩く音が聞こえる。珍しいこともあるものだ。こうも続けてここへたどり着くものがあろうとは。

そんな事を思っていると、聞きおぼえのある声が聞こえた。

「また来ますって言いましたでしょう？門番様」

にこやかに笑う少女の顔。酷く驚いた。

「以前ここに来た者も同じ事を言っておったよ。また来ると。しかし、来る事は無かった。来られなんだ。それが普通なのだよ」

「その話、私にしてみれば少し意外に思えます。それでもきっと何か事情があったのですよ。私に来られて彼に来られないわけ無い」

穂琥の言い切った言葉を聞いて門番は苦笑した。

「以前、誰がここに着たのか知っておるのか？」

「勘、ですが。私の兄です」

「そうか。まぁ、合っておるよ」

門番は苦しげに笑う。そんな姿を見て穂琥は門番の今おかれている状況を心苦しく思っていた。

「こんな所に貴女は在っていい存在ではないと思うのです。間違っていませんでしょう？」

「さてね。小娘に何がわかるというのだ？」

門番はまるで穂琥を脅すように呻く。しかし穂琥はそんな言葉すらもしっかりと受け止める。

「先ほどは失礼致しました。門番様に名乗らせようとしてしまって。それは『禁忌』でしたね」

穂琥のその言葉に門番は酷く反応した。最早、この少女に自分の存在を隠す必要が無いということを悟らせた。

「貴女様のお名前、簾堵乃槽耀（すとのしょうよう）、ですね？」

「知っておったのか・・・」

彼女の唸るような低い声が穂琥の耳に届く。それに応えようとしたが、それよりも早く穂琥の言葉に反応するように門番の身体に巻きついていた鎖が光を帯びて砕け散る。それと同時覆いかぶさっていた布も緑色の美しい炎に焼かれ消え去る。

そうして現れたのは目も疑う妖麗な美しい姿。紅蓮の様に燃ゆる紅き衣に、海の様な深い藍の髪が地面に付きそうなほど長く煌いていた。すっと開けたその瞳は衣と似たしかしそれはまた異なった強く輝く緋（あか）。それに反して真っ白いその肌は今にも透けてしまいそうなほどだった。そんな白い肌を隠すことのない素足がこの真っ暗な空間に降り立つ。

「正直言うと知りませんでした。それでも門を潜るとき、誰かが教えてくれたような気がしたのです。簾堵乃槽耀様、簾乃神（れんないしん）様。貴女様は禁忌を犯した古き神、ですね」

「あぁ・・・いかにも」

姿だけでなく声も美しい。透き通った曇りの無い美しい声を轟かせ

る。

「礼を、しなければならなくなったなぁ」

「いいえ。構いません。私などがこの様な出過ぎた真似をしてしまい、申し訳ありません」

彼女は美しく微笑む。緋い目が煌き穂琥に向う。穂琥はその目にうっかり飲み込まれてしまいそうだった。

「いや、良いわ。時期も丁度よい。さぁ、ぬしも帰るがよい」

「はい」

帰り間際に兄に渡して欲しいと簾乃神から封を渡されそれをしっかりと懐にしまって穂琥は目を閉じるのだった。

気がついたらベッドから落ちていた。それは身体が痛いわけだ。何とか身体を起こすと窓辺の椅子に腰を下ろした薪がいた。しかし、さっきとは打って変わって落ち着いた表情をして此方を見据えていた。

「お帰り」

静かにそう言った薪にただいまと返す穂琥。とても穏やかで落ちついた目をしているので穂琥は少し安心した。先程みたいに青ざめさせてしまっては穂琥としても申し訳ない気持ちになる。

薪は立ち上がって穂琥の前で座った。目線が丁度同じ位置になった。そして穂琥の頬をそっと包むようにして触れると穏やかなその目を穂琥にしっかりと合わせた。

「気を失っていたのはこれが原因だったんだな。正式な開眼、おめでとう」
「気づいたの・・・？」
「そらね。あの門を潜ればそのものからはそれなりに眞稀が放出されることになるからね」
穂琥からあふれ出す眞稀を外に漏れないように必死に抑えてくれていたことに感謝する穂琥だった。
ベッドに戻ろうと立ち上がったとき、懐に違和感を覚えてそこに触れる。
「あ」
穂琥の漏らした声に部屋を出ようとしていた薪が足を止めた。
「どうした？」
「封を、もらったの」
「封？」
穂琥は懐からその封を取り出して薪に渡した。そしてそれの内容を確認した瞬間、薪の顔から血の気が一気に引いた。明らかに動揺して目が泳いでいる薪のその姿があまりにも珍しいことなので穂琥まで動揺してきた。
「なんて事を・・・」
やっともらした一言がそれだったので穂琥は肩を竦めた。もしかしたら先ほどの門番の件、やってはいけない事だったのかもしれない。

「何をして・・・帰ってきたんだ？」

薪の震える言葉に驚きながら穂琥はとりあえず自分のした事を説明する。

「ええっと・・・。門番様を解放・・・？してきて・・・」

「そういうことを聞いているんじゃないよ。簾乃神を開放したのはわかる。だけどそれだけでこんな言葉をもらえるなんて思えない・・・！」

薪の口から当然のように簾乃神の名前が出たので少し疑問に思ったが自分にわかったくらいだから薪だって知っていてもおかしくはないのだろうと思うことにした穂琥だった。

動揺する薪の声がいつもより荒れているので怒っているのかと不安に駆られるがそういうわけではないらしいと解釈する穂琥。そして薪に門前で起きたことを事細かに説明するように求められ、出来うる限り正確にあった出来事を伝える。

話しを聞いた薪は顔を緊張でこわばらせていた。自分がそんなにもいけないことをしてしまったのかと不安に駆られた。

「いや、触れずに・・・か。オレも母上もさすがに門には触れたし踏ん張りもしたんだが・・・」

薪に言葉を聞いて穂琥は絶句した。そんな事は・・・！それではまるで・・・。

「やっぱり穂琥は・・・・・凄いな」

「え・・・・・・・？」

あまりに自然に出過ぎた薪のその言葉に嘘も偽りも嘲りも嫌味も無い。ただ純粋にそう思った薪の言葉に、穂琥は言葉を詰まらせた。薪が自分のことをそんな風に言ってくれたことなど、一度も無かったから。

第十九話　神の犯した路

初めてだ。薪がここまで「凄い」と言い切ったのは。それがあまりにありえ無すぎていつものようにはしゃいで喜ぶことすら出来なかった。

薪はふっと息を吐く。それからあの簾乃神が何故、『禁忌を犯した古き神』といわれるのかを話してくれた。

その昔。人や眞匏祇なんていう小さなものの寿命では考えられないくらい昔の話。友の裏切りで神界を追われた哀れな神がいた。その神が簾乃神、簾堵乃槽耀であった。そしてその裏切った友の名が京董夜繪鏡（けいとうよかいきょう）、京鏡神（けいきょうしん）だった。

神々の都合など、一眞匏祇の薪には全くわからない。それに神界でもそれは非常に露見したくない汚れた歴史。故にあまり知られていないことではあるので詳しいことまで知っているわけではない。

その京鏡神が何らかの理由にて神々を裏切る行為を働いた。しかし、京鏡神は簾乃神にその濡れ衣を着せた。

「そんな！？そんなこと！神のする事じゃない！」

「神といえど万能なわけではない。そういうことなんだよ」

薪はどこか寂しそうにそう応えた。その表情が何処と無く悲しくて穂琥はそれ以上の言葉を続けることが出来なかった。

しかし、簾乃神は京鏡神の濡れ衣を自ら着た。友と思っていた者の裏切りに酷く心を痛めたが、それでも大切に思ったがあまり、簾

乃神はその濡れ衣を着ることを選んでしまった。そのせいで簾乃神は有りもしない罪を科せられ担う羽目となった。

「通称、『認可の門』と呼ばれる桃眼の最終段階にて使用される門。それの番人をやらされたのさ」

元は神と崇められた崇高たる存在があんな暗く孤独に苛まれる屈辱の空間でこの長いこと押し込められていた。あんな惨めな悲惨な姿で。孤独と闇が支配するその空間で一体どれだけの時間を過ごしてきたことか。生まれたばかりの薪や穂琥には想像も付かない。

「でも・・・。そういう情報を薪が知っているという事は神々だってそれを知らない訳ないでしょう？何故簾乃神様を開放しなかったの？」

「いい質問だな。オレはこの情報を特別なルートから入手した。だからおそらく眞匏祇の世界でこの話を知っているのはオレと穂琥だけだ」

薪の言った特別ルートが気になった穂琥だった。

「今更、罪を犯した神は京鏡神でした。簾乃神と間違えました、ごめんなさい。なんてそんな軽いことがいえるほどこの世界は甘くない。神の世界も、オレら眞匏祇の世界も」

そして何より、本当に罪を犯した京鏡神はいまだに姿を消したまま。つまり、眞匏祇の世界に伝うにも証拠が無い。本当に京鏡神がやったのかどうか、定かでない以上、神々の勝手な判断と思われても仕方の無いこと。

「それじゃぁ、簾乃神様はどうなるの？罪を投げ出して逃げたとか

にはならないの？！」
「それなんだよ。オレと母上が認可の門を潜ったときに簾乃神様を解放しなかったのはそれに繋がっている」
確かに、穂琥に出来たのだから薪に、ましてや母、紫火が出来ないわけがない。
穂琥が認可の門を潜ったあの時は丁度、集神（しゅうしん）と呼ばれる期間だった。字の如く、神々が集う特殊な日。何百年に一度行われるその日。ありとあらゆる事情があるにせよ、全神がその場に集結する日。よって、京鏡神もこの集いに抗う事は出来ない。故に自白するべき存在もあるために簾乃神を開放するためには丁度いい日だったということ。
偶然が重なって出来たこの時。神々の心が最も穏やかに最も静寂なこの時期なら簾乃神も京鏡神もその身を洗い落とせるということ。
「そしてこの集神で京鏡神様と簾乃神様がご対面となるわけだ」
「ど、どうなるのかな・・・」
「さぁね。神々の心などオレなんかにはわからんよ」
薪はどこか冷たくそう言った。
「特別なルートって何？」
「気になるのか？」
「当たり前じゃない。そんな、神々のことをそんなに簡単に知ることなんて普通出来ないでしょう」
「・・・そうだなぁ」
薪は少しだけ考えたそぶりを見せてから小さく笑って簾乃神自ら教

えてくれたと白状した。当時の薪はそんな細かな神々の事情などわからない年頃だった。だから、名を言えば開放できるのならそうすると簾乃神に言い寄った。しかし、簾乃神はそうして、自分の身の上と状況を薪に話すことでそれを避けた。

集神でもない日に神々の前に京鏡神を出せばきっとただではすまなかったはず。

「たった一人、愛した神を傷つけたくなかったのだろうな」

「うん・・・。・・・・・。　・・・・・・・」

穂琥は一度薪の言葉に同意してから薪の顔を凝視した。それに不機嫌そうになんだと応えた薪。

「えっと。ごめん。もう一回言って。薪とは思えない失言、じゃない・・・言葉を聞いた気がしたの・・・！」

真剣な穂琥の表情に負けて薪はこわごわもう一度同じ事を言う。

「え、いや、だから・・・。たった一人・・・・愛した神を傷つけたく・・・」

「え？！」

「なんだよ！」

穂琥の反応に流石に怒る薪。穂琥の耳に飛び込んできた薪とはとても思えない単語。薪が何を間違っても『愛した』なんて事を言うとはとても思えない！

「簾乃神様が言っていたことだけど・・・」

「え？！そうなの！？あぁ～、なるほど～！」

妙に納得した穂琥を薪は軽蔑のまなざしを送る。一人で勝手に納得している穂琥を放って置いて薪は持っている紙に視線を落とす。そこに羅列した文字とはいえない形のもの。これが神の世界での文字。伝えたい相手にのみその文字の解読を許す特殊な文字。それを読もうと目で追うと勝手に頭の中にそれが言葉となって浮かんでくる。

―其の力見事なり。以後悪しき様に使わぬ様に願う。ぬしらを今後、出来うる限りで補佐しよう

紙の最後に書かれていた文。崇高たる神にここまで言わせることなど普通ではありえない。神とは敬いときに畏れ称える存在。願うならば此方から護って欲しいと願い出るしかない。それでもそれを聞きとめてくれるかは神々のお心のみが知れること。にもかかわらず神自ら護ることを約束してきている。薪はそれがどこか畏ろしく思えた。

拍子抜けする穂琥の顔を見てため息をつく。そしてそんな穂琥に軽く制裁を加えて明日また修行をするから早く寝るようにと促した。

第二十話　密かな不安

絶えず頭の中で回る神の言葉。薪はそれを頭から無理やり振り払って軽くした打ちした。別に神に舌打ちしたわけではなく自分の弱さにだ。

「運命を導く神と崇められていた・・・っけな」

簾乃神のことを思いながら薪はそんな風に考えた。そんな風にぼうっとしていたから薪は見事に目の前の岩に気づかず激突する。

「いって・・・ぇ・・・。くそ・・・・」

神の予言とは大いに当たるものだ。それを直感と本能で感じ取って薪はため息をつく。

―災いが近づいている。あの娘に嫌な感覚を覚えた。ぬしらに幸運を

薪は再び舌打ちをする。

翌日、薪はいつまでも寝ている穂琥をたたき起こして（おそらく部屋からは穂琥の絶叫が聞こえたことだろう）薪はさっさと部屋を出て行く。

寝ぼけながら降りてきた穂琥に早く顔を洗って来いと命じる。それに呑気の呼応する穂琥の背を見て薪は小さく息をつく。決して呆れているわけではなく。不安で不安で押しつぶされそうで。決してあってはならないこと。

―まさか穂琥を失うことになったら・・・

薪はそんなよからぬ考えを頭から無理やり遠ざける。無い。ありえない。穂琥は絶対に護る。おのずと身体が震える。

洗面所から戻ってきて席について飯～と要求したが薪の返答が無いために薪を見ると薪が小さく震えているように見えて穂琥は目を疑った。薪が？不安を覚えた穂琥が薪に安否を尋ねようとしたがそんな不安、薪の一言で簡単に吹っ飛んだ。

「飯がまずくなるからもう少しまともな顔していろよ」

「んだとこらあぁぁ！！」

第二十一話　感じる疲労と目にする疲労

修行を再開させたわけだが、やはり認可の門を潜ってきただけあって今までの苦労はなんだったのかと疑問にすら思えるくらい楽々と進んでいった。そんな折に、薪と『眼』の話をすることになった。

「開眼って他にも色々な種類があるんでしょう？」
「そうだな」
「薪は何が使えるの？」
「ん～？まぁ、色々？」
「なにそれ」

まるで何かを誤魔化すようなその言い方に穂琥は口を尖らせる。薪が得意としてよく使うのは紅眼だったと記憶している。穂琥はそれを薪に言うとまぁ、そうだと返答をもらった。しかしどこか薪の応えに渋りを感じたので追求すると薪は諦めたようにため息をついた。

「いや、まぁ。もう一個、得意なものはあるんだけどあまり使いたくないんだよ」
「え？得意なのに使いたくないって？」
「かなり危険なものでね。冷静でないときに使うとまずいんだ」

薪が出来る開眼の数はいくつかあるのを知っている。その中で最も使いやすくて強いものがあると薪は話す。

「まぁ、教えてやってもいいけど。絶対に口外するなよ？いくらお前でも口外したら本気でお前を消しにかかるからな」

滅多にない薪のこの手の脅しに穂琥は驚いて小刻みに何度も首を縦

に振った。

「オレの最高峰の力だと、自分では思っている」

薪のその口調はまるでこれから先、それを使うみたいに聞こえて穂琥は何だか嫌な気がした。

薪がその『眼』の説明を終えると穂琥は驚いて最初声も出なかった。

「な、何それ?!反則でしょ、そんな力・・・!チートだ!」

「ま、そういうなって。この力も結構レアだけどそれ以上にレアなのがあってオレが知る限りこの開眼に匹敵できる開眼をできたのは過去には母上しかいないと記憶している」

紫火の開眼は二つ。桃眼とそのもう一つ。しかし薪はそんな事はありえないから話はしないといってさっさと修行に戻ってしまった。どこか消化不良な気のする穂琥だったがそうなった薪に何を言っても回答は帰ってこないことを重々承知しているので仕方なく穂琥は修行に移る。

次のステップで穂琥は衝撃を受けた。魂石を体内から強制的に奪取するもの。しかし、これは下手すると簡単に相手を傷つけてしまうために力加減と操作が非常に難しいものだった。いくら認可の門を通ったからといってそう容易に出来るものではなかった。

薪が用意したダミーは全部で２０体。傷つけないように相手を痛めないように魂石のみを奪取する方法。桃眼で見極めた道しるべを通ってその魂石を眞稀によって引き抜く。しかし・・・一。

穂琥は5体を完全な戦闘不能にした。これでは再起までにどれほどの時間がかかるかわからないくらい。

「そ、そんな・・・！5体以外、全滅だなんて！！」

残った5体以外を全て完全に破壊してしまった。ちゃんと加減をしたのに。落ち込む穂琥に薪が優しく声を掛ける。

「お前にはちゃんと優しさがある。だから5体『も』残せたんだ」

「え？」

薪は少しだけ影を落として過去を振り返る。薪が最初にこのダミーで修行したとき、このダミーの全てを薪は破壊してしまった。

「穂琥の持つ『優しさ』はオレの持つものとは格が違う。大丈夫だって。お前なら出来る。だって母上の子だろう？」

「薪・・・・。うん・・・・。わかった。頑張る」

「おう」

頭を薪に軽く撫でられて穂琥は少し照れくさそうに笑う。

そうして何とか修行を積み重ねていってとりあえず使用できる段階まで来たと薪は言ってくれた。

「じゃぁ、これで・・・」

「後は最終ステップだけだな」

終わりではないのですね。穂琥は少しだけがっかりしながらも最後に何をやるのか薪に尋ねる。

「なぁ、戦うって何が必要だと思う？」
「え？」
唐突な薪の質問に動揺する穂琥。
「えっと・・・力？気持ち・・・？ん？何だろう？」
「まぁ、今のお前には一番欠けているものだよ」
「え？何だろう・・・？」
どんなに修行を積んだものでも。どんなに才能があるものでも。身体を動かさぬものに勝利は無い。知識が勝ち抜くことが出来るのは子どもの遊びまでだ。実際に刀を交えることとなればそんな知識よりも何よりも大事なものが必要となるものがある。
「直感」
薪が言う。
「そんな！？私ってそれが一番縁遠いんですけど？！」
「だから一番欠けているって言ったじゃないか」
「う・・・」
直感こそが戦闘で最も大事なスキル。相手がどう動いて次にどうするのか。それを見極めることが勝利への架け橋となる。そしてその直感こそ、つけるには。
「ま、実戦しかないわけだ。と、言うことで！」
急激に薪の声が明るくなったので穂琥は背中の辺りがぞくっとした。よく言う、嫌な予感だ。こういう直感ならきっと実戦を積んで知っ

ているのかもしれない。

「来い」

穂琥に向って剣を向ける薪に穂琥は己の『嫌な予感』が当たってしまったことにショックを受けた。

「実戦でのみ、直感は得られるんだよ。そんなわけで今日からはオレが相手してやるから。かかって来い」

「そ・・・そ・・・そんな無茶なあああぁぁぁぁぁぁ！！」

修行場にしばらく穂琥の絶叫が木霊するのでした。

今までの修行って何だったのだろう。子どもの手遊び程度だったのかなぁ。だって薪ったら容赦ないんだもん。

そろそろ日が落ちるという時間。穂琥がへばって修行は終了。穂琥はすっかりぐったりとしてしまって部屋に戻るとソファにダイブしてそのまま寝息を立て始める。そんな穂琥を見て薪はため息をついてシャワーを浴びに行くのだった。

穂琥はわかっていないかもしれないけれど、この修行で誰が消耗するって薪に決まっている。穂琥が何度も破壊してしまうダミーを眞稀のみで生成しているのは薪であるし、コツを教えるために桃眼を開眼する訳だし、修行に付き合いつつも自分の修行もしなくてはならに薪が疲れないわけも無かった。

シャワーから上がってきた薪にたたき起こされて穂琥もシャワーを浴びる。まるで何日もこの水に触れていなかったのではないかと思えるくらい気持ちがよかった。よほど疲れていたんだと実感する

穂琥はのんびりとシャワーを終えた。

出てきて薪を探しても薪がいないので不思議に思って探す。そしてふと、ソファに眼が言った。

「あれ・・・？し、ん？」

薪がソファで枕に顔をうずめて肩を上下に揺らしていた。

―・・・。

少し考える穂琥。そしてこの状況が何であるか、把握したとき一瞬驚いた。

―わっ！？薪、寝てる！？

そんな薪にそっと声を掛けるが薪は起きなかった。声を掛けても、いや、近づいても起きないのは薪とは思えない。もしかしたら失神でもしたのかと不安に思った穂琥はそっと薪の肩を持って仰向けにする。

今までに見たことの無い薪の寝顔。始めてみる寝顔なのでいつもどんな顔をして寝ているかわからないけれど、今回のこの薪は本当に薪とは思えなかった。

―な、なんか・・・可愛いんですけど・・・・

そんな事を思いながら穂琥はソファの前に腰を下ろした。そしてやっとその事実に気づく。

―あ、そうか・・・。疲れているのは薪のほうだったんだ・・・

穂琥を気遣って薪はそんなそぶり一切見せなかった。確かに薪は体力だって気力だってある。それでもこの二日、眞稀を多量に使っていたにもかかわらず疲れたの類の言葉は聞いていない。むしろ、大丈夫か、といった穂琥を労わる言葉だけ。

そのことに今まで一切気づかなかった自分に恥じた。自分だけ辛いと思い込んでいた自分が悔しかった。そんな思いも相重なって。穂琥はそっと開眼する。そして薪をそっと包む。

「ん・・・？どわぁ！？」

眼を覚ました薪が急に飛び起きたので穂琥は勢いで閉眼した。

「な、何よ！？せっかく癒してあげようと思ったのに！！」

口を尖らせた穂琥だったが、どうにも薪の様子がおかしかった。

「え・・・あ・・・いや。ゴメン。ありがとう・・・・でも大丈夫だから・・・」

「・・・？大丈夫？」

「あぁ」

短く応えた薪のその言葉に疑問を覚えながらも穂琥は薪の膝に手を置く。

「？」

不思議そうな顔をする薪から目線を外して穂琥は薪の膝に置いた自

分の手を見る。

「ごめんね。気づかなかったの。いつも薪ってば飄々としているから」

「別に良いって」

「よくないもん！」

急に穂琥の荒れた声に薪は驚く。

護られるだけじゃダメなんだ。自分だって護りたい。薪を護ることが出来る力が欲しい。それでもまだまだ全然駄目で薪の足元にも及んでいない。

「だから・・・え？」

言おうとした穂琥が言葉を切ったのは薪が頭に手を置いてきたからだ。穂琥を見るその瞳はなんと温かいのだろう。

「気にするなって。穂琥。オレを護りたいって気持ちは素直に嬉しい。同情とかそういうのではなく、本当に。でもな。穂琥が護ることのできるものはそんなものじゃないんだよ」

「え？」

「よく自分で考えてみろ。何が護れるか、何を護るべきなのか」

「うん・・・」

今の穂琥にこの時言った薪の言葉を理解する事は出来なかった。自分の目の前で精一杯の穂琥には。薪の言ったその言葉の意味を知ったとき、きっと穂琥は自分の力を完全に使えるときだろう。そしてこの時から既に穂琥の中に眠るその力に気づいていた薪に素直な驚きを覚えることだろう。

第二十二話　心の悲痛と叫び

実戦訓練を始めて数日。薪から告げられた言葉に穂琥は震えていた。夢であって欲しいとどれだけ願ったことか。夢だと願うほどそれは果てしなく現実。薪、もう少し待ってよ。いくらなんでも早すぎるよ。

突然告げられたこと。昨晩、疲労していた薪を治した。完全に回復させる事は出来なかった。薪の持っている疲労は予想以上に酷い。そして今朝、そんな薪の顔を見て余計にそう思った。それなのに。

「明日、奴らの本拠地に行く」

あまりに突然言われたその報告に穂琥は愕然とした。つまりは争いが起こるということ。まだ完全に回復できていない薪と、覚悟も何も出来ていない穂琥が。一体何が出来るというのだろう。生半可な気持ちで望めばそれは死を意味することとなる。しかしそれでも薪はもう明日にはという。一体どうして。

震える穂琥の心は痛いほどよくわかる。それでももう動かなければならない理由が出来てしまった。まず、大本の理由として主と呼ばれていたやつの下に痲臨が存在すること。痲臨は使い方を誤れば悲惨な事態しか生まない危険な宝玉。地球はなんと脆いことか。痲臨の力がもし暴発でもすればきっと簡単に壊れてしまう。

だから穂琥の心がどれだけ揺れていようが、もう、手を出さないわけにはいかない。薪は心底思う。連れてくるべきではなかったと。そしてその思いを強くさせているのがあの簾乃神の言った言葉。

薪の家には眞匏祇の世界とつながるゲートが存在する。そのゲートで穂琥を返そうと思った。しかし、事もあろうか、ゲートが閉じて開かない。穂琥を返すことも出来ない状況になってしまっていた。そのことに薪は絶望した。

穂琥が震える心なら薪はおそらく不安の心。果てしない、今までにかんじたことの無い不安が薪を襲っている。万が一にも、穂琥が手元から離れるようなことがあったら。

―いいや、そんな事考えていたら駄目だ。話にならない

薪はその悪い考えを何度も無理やり頭から遠ざける。穂琥を失うことなど・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5247y/

眞匏祇’

2011年11月21日18時56分発行